

令和6年度 文部科学省委託事業
「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業
(都道府県の枠組みを超えた探究プラットフォーム構築)」

中間報告書

認定NPO法人カタリバ

目次

1. 本事業の概要.....	3
1.1 背景と目的.....	3
1.2 取り組みの概要.....	3
1.3 ネットワーク構成校.....	3
2. 本年度実施事項.....	4
2.1 学校間での探究的な学びの機会の構築・実施.....	4
2.2 プラットフォーム構築に向けた取組.....	5
3. 本年度実施経過.....	6
3.1 学校間での探究的な学びの機会の構築・実施.....	7
3.2 プラットフォーム構築に向けた取り組み.....	12
4. 本年度成果および課題の検証.....	19
4.1. 調査概要.....	19
4.2. 調査結果.....	20
4.2.1 オンラインを活用した各種連携プログラムに対する評価.....	20
4.2.2 オンライン連携を通じた生徒および教員の変化.....	28
4.2.3 探究活動に関する課題意識および本ネットワークの意義.....	40
4.3. オンラインネットワークが担うべき役割について.....	43
4.4. 自走に向けた論点.....	45
5. 来年度以降に取り組むべき課題.....	47
5.1. 来年度以降の課題および改善点.....	47
5.2. 来年度の検証事項.....	48
6. 参考資料.....	50

1. 本事業の概要

1.1 背景と目的

高等学校は、進学率が約99%に達し、今日では中学校を卒業したほぼ全ての生徒が進学する教育機関となっている。高等学校には多様な背景を持つ生徒が在籍していることから、義務教育段階において育成された資質・能力を更に発展させながら、生徒の多様な能力・適性、興味・関心等に応じた学びを実現することが必要である。しかし、現状では、学校の立地、リソース等に伴う制約により、学校が生徒の多様な学習ニーズに対応しきれていない、若しくは潜在的なニーズを引き出せていないといった課題がある。

令和5年8月の高等学校教育の在り方ワーキンググループ中間まとめにおいては、こうした課題を解消するために、地理的状況や各学校・課程・学科の枠に関わらず、いずれの高等学校においても多様な学習ニーズに対応し、潜在的なニーズに応える柔軟で質の高い学びを実現し、全ての生徒の可能性を最大限引き出すことができるようにしていくべきであり、このための方策として、教科・科目充実型の遠隔授業や通信教育の活用、学校間連携等の促進等を一層進めていくことが重要とされている。

これらも踏まえ、小規模校の生徒等が、総合的な探究の時間等において、地域や学校を超えてつながり、同じ志を持っている同世代から学ぶといったことを可能とするプラットフォーム構築を行う。

1.2 取り組みの概要

弊団体は、探究的な学びの機会を円滑に創出するため、日本各地の小規模校が接続する学校横断型ネットワーク（以下、本ネットワークという。）の構築を通じて、学校同士の垣根を超えて探究リソースを共有することを目指す。探究リソースとは、生徒が探究的な学びを深めるために必要となる、教員の知見、生徒の興味関心、教材および外部人材等であると定義する。

本ネットワークにおいて、探究リソースの共有を促すため、総合的な探究の時間等におけるオンライン合同授業、生徒の興味同士のマッチング、外部人材の活用ならびに教員勉強会等に取り組み、探究活動への影響や教員の意識変化等について効果検証を実施する。

さらに、将来的に本ネットワークが自走可能となるように、各年度において取り組み改善を構成校教員と行うとともに、オンライン連携の運営・継続ノウハウを明らかにする。

1.3 ネットワーク構成校

令和6年度構成校の設定方法

NP0カタリバが募集を行い、教育課程内での連携（オンライン合同授業）の参加に承諾した学校を対象として設定した。本事業の趣旨をふまえ、地方に所在する小規模高校（1学年あたりおおむね3学級以下の規模の学校）を中心とした。

図表1-1 構成校一覧

種別	学校名（所在地）
公立・全日制	北海道池田高等学校／北海道鹿追高等学校／岩手県立大槌高等学校／岩手県立遠野緑峰高校／岩手県立前沢高等学校／山形県立小国高等学校／山形県立新庄南高等学校／福島県立只見高等学校／茨城県立小瀬高等学校／埼玉県立越生高等学校／静岡県立川根高等学校／静岡県立松崎高等学校／長野県阿南高等学校／長野県軽井沢高等学校／京都府立須知高等学校／鳥取県立青谷高等学校／島根県立浜田商業高等学校／島根県立吉賀高等学校／徳島県立那賀高等学校／熊本県立天草拓心高等学校／熊本県立小国高等学校／長崎県立松浦高等学校／長崎県立宇久高等学校／長崎県立猶興館高等学校／鹿児島県立沖永良部高等学校
公立特別支援学校	栃木県立足利特別支援学校
私立・全日制	岩手女子高等学校／中村高等学校（東京都）／片山学園高等学校（富山）
私立・通信制	星槎国際高等学校八王子学習センター／第一学院高等学校横浜キャンパス

2. 本年度実施事項

令和6年度の取り組みとして実施した事項を以下に示す。本事業の取り組みは、①学校間での探究的な学びの機会の構築・実施および②プラットフォーム構築に向けた取り組みの二つに分類される。探究ネットワークを土台としたプラットフォームの機能開発と効果検証を実施する。

2.1 学校間での探究的な学びの機会の構築・実施

探究的な学びの機会の開発ポイントの特定（機能開発）

- ・探究活動の質を高めるため、どのような学校間連携の在り方が必要かを明らかにする

探究活動でのオンライン連携による効果検証

- ・他地域連携活動により、生徒の探究活動にどのようなメリットが生じるかを明らかにする

自走に向けたノウハウの蓄積

- ・運営上の手続きや課題を明らかにする

2.1.1 オンライン合同授業（教育課程内）

- ・複数の地域にまたがる構成校3～4校を一単位とし、年3回実施（各2コマ）する

第1回（6月頃）：探究テーマ共有会

- ・他校生徒と自己紹介や興味関心の相互発表を実施

第2回（10月頃）：探究ブラッシュアップ交流会

- ・類似した探究テーマに取り組む生徒4～5名を1つのグループとし、探究活動に関する途中経過の成果や悩みについて他校生徒と共有

第3回（2月頃）：合同発表・振り返り会

- ・1年間の探究活動の過程や成果を発表するとともに、得た学びを共有

2.1.2 興味関心別マッチング（教育課程内・外）

- ・ 共通の探究テーマに取り組む高校生同士を繋ぎ、交流活動を実施
- ・ 2次元メタバースによるオンラインスペースを開室し、興味関心が近い生徒同士による個別交流もしくは弊団体職員への探究活動全般の相談を受け付け

2.1.3 放課後探究ゼミ（教育課程外）

- ・ 探究活動を授業外でも積極的に取り組みたい生徒を主な対象として、放課後での継続的な連携活動を実施

2.2 プラットフォーム構築に向けた取組

プラットフォームの開発ポイントの特定（機能開発）

- ・ 探究活動の支援方法や学校間連携の実施ノウハウを共有するために、どのような内容や方法が効果的かを検証する

プラットフォームに求められる効果検証

- ・ 探究活動の支援者（教員）にどのようなメリットが生じるかを明らかにする

自走に向けたノウハウの蓄積

- ・ 運営上の手続きや課題を明らかにする

2.2.1 ポータルサイト等を活用したプラットフォーム構築

- ・ 多機能クラウドツール「Notion」により構成校教員用のポータルサイトを立ち上げ、各種情報共有および蓄積の仕組みを構築

2.2.2 探究リソース共有の仕組み構築

ア サポーター人材バンクの構築

- ・ 合同授業に参加したサポーターから希望者を募り、ポータルサイトにプロフィール情報（有する専門性・探究伴走の経験等）を掲載し、生徒もしくは教員から、任意のタイミングでヒアリングやフィードバックの依頼を受け付け

イ 生徒の興味関心（探究テーマ）データベースの構築

- ・ 生徒の探究テーマとその進捗状況を集約し一覧化

ウ 構成校教員によるナレッジシェア

①探究活動支援に関する各種資料・事例収集

- ・ 各校が使用している探究学習教材および関連資料、探究活動事例（発表資料・動画）データを集約し、ポータルサイトに掲載

②教員向け研修・勉強会

- ・ 構成校教員へ探究活動支援における課題意識調査を行い、複数校が共有して持つ悩みや関心度の高いトピックを抽出し、該当テーマに関するオンライン研修会を開催

3. 本年度実施経過

令和6年度に実施した取り組みの経過および詳細を以下に示す。

図表3-1 本年度実施経過

	事業の内容
令和6年 5月	◆構成校同士の顔合わせ、取り組みの説明
6月	◆オンライン合同授業（第1回） ・「探究テーマ交流会」実施 ◆放課後探究ゼミ①② ◆構成校現地訪問 ・岩手県立大槌高等学校 ・岩手県立遠野緑峰高等学校 ・岩手県立前沢高等学校 ・第一学院高等学校横浜キャンパス ◆教員用ポータルサイト（Notion）立ち上げ
7月	◆放課後探究ゼミ③④⑤ ◆サポーター人材バンク作成 ◆構成校現地訪問 ・山形県立小国高等学校
8月	◆教員間オンライン勉強会 ・8月集合研修実施 ◆興味関心データベース作成
9月	◆第2回合同授業 事前打ち合わせ ◆構成校現地訪問 ・長崎県立猶興館高等学校 ・長崎県立松浦高等学校
10月	◆メタバースを活用した探究交流 ◆放課後探究ゼミ①② ◆オンライン合同授業（第2回） ・「探究ブラッシュアップ交流会」実施 ◆構成校現地訪問 ・静岡県立川根高等学校 ・星槎国際高校 八王子学習センター ・北海道鹿追高等学校 ・北海道池田高等学校
11月	◆放課後探究ゼミ③④ ◆メタバースを活用した探究交流 ◆興味関心データベース更新 ◆テーマ別個別交流の活用促し
12月	◆第3回オンライン合同授業 事前打ち合わせ ◆放課後探究ゼミ⑤ ◆メタバースを活用した探究交流

	◆学習指導要領「総合的な探究の時間」に関する教員座談会 ◆テーマ別個別交流の活用促し
1月	◆オンライン合同授業（第3回）合同発表・振り返り会 ◆メタバースを活用した探究交流 ◆テーマ別個別交流の活用促し
2月	◆オンライン合同授業（第3回）合同発表・振り返り会
3月	◆構成校と次年度に向けた打ち合わせ ◆合同授業等、各種プログラムの改善に向けた準備

3.1 学校間での探究的な学びの機会の構築・実施

3.1.1 オンライン合同授業（教育課程内）

○ 第1回（6月）：探究テーマ交流会

・他校生徒と自己紹介や興味関心の相互発表。オンラインでの他校交流に慣れることと、各自の探究活動のテーマ設定や実行計画に対するヒントを得ることを目指して取り組んだ。

図表3-2 第1回オンライン合同授業日程および参加校

日程		参加校
A	6月12日（水）	山形県立小国高等学校、島根県立吉賀高等学校 茨城県立小瀬高等学校、埼玉県立越生高等学校 徳島県立那賀高等学校
B	6月17日（月）	片山学園高等学校、長崎県立猶興館高等学校 島根県立浜田商業高等学校
C	6月20日（木）	栃木県立足利特別支援学校、中村高等学校 長野県軽井沢高等学校、福島県立只見高等学校 第一学院高等学校 横浜キャンパス
D	6月25日（火）	岩手県立大槌高等学校、静岡県立川根高等学校 鳥取県立青谷高等学校、北海道鹿追高等学校 山形県立新庄南高等学校 金山校
E	6月26日（水）	北海道池田高等学校、岩手県立遠野緑峰高等学校 星槎国際高等学校 八王子学習センター
F	6月28日（金）	京都府立須知高等学校、長野県阿南高等学校 岩手県立前沢高等学校、鹿児島県立沖永良部高等学校

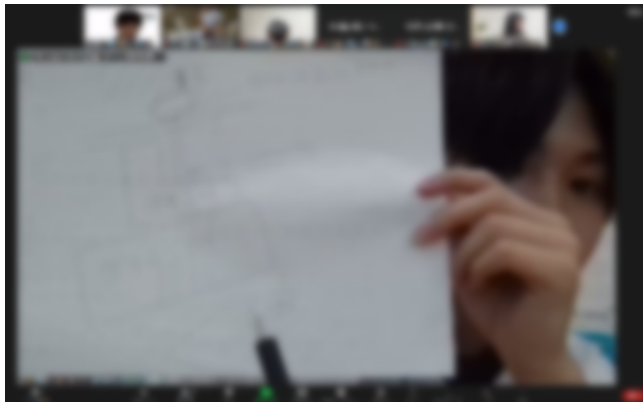
<連携グループの編成観点>

オンライン合同授業をきっかけとして探究テーマが近いセットの継続的な連携につながることを企図して、①総合探究の授業曜日が重なる②都道府県が異なる学校の組み合わせ③探究活動の年間計画ができるだけ類似しているといった3つの観点に沿って、合同授業実施の連携グループを編成した。

図表3-3 第1回オンライン合同授業タイムテーブル

開始	終了	時間	内容	部屋
13:40	13:45	0:05	[はじめの挨拶と本プログラムの説明]	メインセッション
13:45	13:50	0:05	[オンラインコミュニケーションの作法] ・ポイントやマナー － 相槌、拍手などのリアクション － チャットの使い方 など	メインセッション
13:50	14:05	0:15	[各校代表者の学校紹介] *1校3分ずつ ・学校の概要紹介 － 学校の特徴、おすすめポイントの紹介	メインセッション
14:05	14:20	0:15	[アイスブレイク] *1人3分ずつ（発表＋質疑） ・自分自身と地元の紹介（2分） － 呼んでほしい名前 － 最近あった嬉しかったこと － 地元の好きなところ／おすすめスポット ・質問（1分）	ブレイクアウトルーム
14:20	15:00	0:40	[探究テーマ共有] *1人10分ずつ（発表＋質疑） ・探究テーマの共有（3分） － どんなことに興味があるのか － なぜこのテーマに関心を持ったのか － 今日みんなに聞いてみたいこと ・コメントおよび質問（7分）	ブレイクアウトルーム
15:00	15:10	0:10	[感想共有] ・チャットで感想を送ってもらう ・手を挙げた生徒数名より感想をもらう ・事後アンケートの案内	メインセッション

図表3-4 第1回オンライン合同授業活動の様子



（ブレイクアウトルーム内での活動）



（メインセッションでの様子）

○ 第2回（10月頃）：探究ブラッシュアップ交流会

・類似した探究テーマに取り組む生徒4～5名を1つのグループとし、探究活動に関する現時点での成果や悩みについて他校生徒と共有した。

・事前に研修を受講したサポーターや構成校教員が各グループに参加し、活動のファシリテーションを行った。多様な角度から意見を出し合うことで、新たな視点の獲得に繋げた。

図表3-5 第2回オンライン合同授業日程および参加校

日程		参加校
A	10月10日（木）	埼玉県立越生高等学校、静岡県立川根高等学校 長崎県立松浦高等学校、京都府立須知高等学校
B	10月21日（月）	山形県立新庄南高等学校 金山校、茨城県立小瀬高等学校 島根県立浜田商業高等学校、岩手女子高等学校京都府立須知高等学校
C	10月23日（水）	北海道池田高等学校、山形県立小国高等学校 星槎国際高等学校 八王子学習センター、岩手女子高等学校
D	10月29日（火）	北海道鹿追高等学校、岩手県立大槌高等学校 栃木県立足利特別支援学校、鳥取県立青谷高等学校 長崎県立猶興館高等学校
E	11月1日（金）	岩手県立前沢高等学校、第一学院高等学校 横浜キャンパス 鹿児島県立沖永良部高等学校、熊本県立小国高等学校
F	11月6日（水）	岩手県立遠野緑峰高等学校、徳島県立那賀高等学校 島根県立吉賀高等学校
G	11月8日（金）	福島県立只見高等学校、片山学園高等学校 長野県阿南高等学校、長野県軽井沢高等学校、中村高等学校

図表3-6 第2回オンライン合同授業タイムテーブル

開始	終了	所要	内容	部屋
13:40	13:50	0:10	[全体オリエンテーション] ・活動の目的と進め方の確認 ・相槌、拍手などのリアクション ・チャット・リアクションボタンの使い方確認	メインセッション
13:50	13:50	0:00	[ブレイクアウトルームへの移動] ・生徒4～5名+サポーター1～2名のグループに分かれる	メインセッション

13:50	15:00	1:10	【自己紹介&アイスブレイク】（10分） ・ 接続確認 ・ 自己紹介&アイスブレイク 【探究発表&ディスカッション】（60分） ・ 生徒が1名あたり15分程度の持ち時間で発表 + 質疑応答を行う <進め方> ・ 発表 5分 ・ コメント+フィードバック 10分×4～5名	ブレイクアウトルーム *サポーターによる進行
15:00	15:10	0:10	【感想共有】 ・ 手を挙げた生徒数名より感想をもらう	メインセッション

○ 第3回（2月頃）：合同発表・振り返り会

- ・ 1年間の探究活動の過程や成果を発表するとともに、得た学びを共有した。
- ・ 事前に研修を受講したサポーターや構成校教員が各グループに参加し、活動のファシリテーションを行った。多様な角度から意見を出し合うことで、新たな視点の獲得に繋げた。

図表3-7 第3回オンライン合同授業日程および参加校

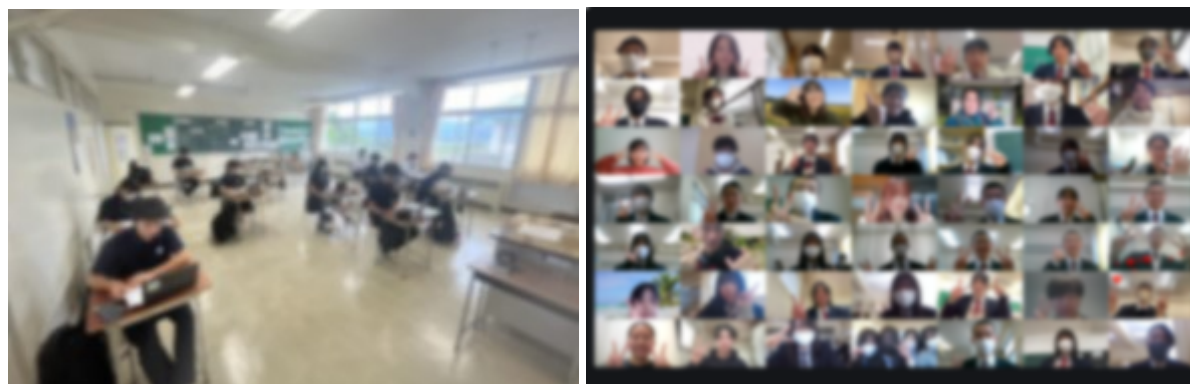
日程		参加校
A	1月21日（火）	岩手県立大槌高等学校、長崎県立猶興館高等学校、長崎県立宇久高等学校
B	1月23日（木）	岩手県立前沢高等学校、長崎県立松浦高等学校、熊本県立小国高等学校
C	1月27日（月）	北海道鹿追高等学校、長野県阿南高等学校、長野県軽井沢高等学校 第一学院高等学校 横浜キャンパス、島根県立吉賀高等学校
D	1月29日（水）	北海道池田高等学校、福島県立只見高等学校 星槎国際高等学校 八王子学習センター、静岡県立川根高等学校
E	2月7日（金）	中村高等学校、京都府立須知高等学校、岩手女子高等学校
F	2月14日（金）	岩手県立遠野緑峰高等学校、熊本県立天草拓心高等学校
G	2月17日（月）	山形県立新庄南高等学校 金山校、島根県立浜田商業高等学校 熊本県立天草拓心高等学校
H	2月20日（木）	山形県立小国高等学校、茨城県立小瀬高等学校 埼玉県立越生高等学校、徳島県立那賀高等学校
I	2月27日（木）	片山学園高等学校、鹿児島県立沖永良部高等学校、岩手女子高等学校

図表3-8 第3回オンライン合同授業タイムテーブル

開始	終了	時間	内容	部屋
13:40	13:50	0:10	【全体オリエンテーション】 ・ 活動の目的と進め方の確認	メインセッション

			・相槌、拍手などのリアクション ・チャット・リアクションボタンの使い方確認	
13:50	13:50	0:00	【ブレイクアウトルームへの移動】 ・生徒4～5名+サポーター1～2名のグループに分かれる	メインセッション
13:50	15:00	1:10	【自己紹介&アイスブレイク】（10分） ・接続確認 ・自己紹介&アイスブレイク 【探究発表&ディスカッション】（60分） ・生徒が1名あたり15分程度の持ち時間で発表+質疑応答を行う <進め方> ・発表 5分 ・コメント+フィードバック 10分×4～5名	ブレイクアウトルーム *サポーターによる進行
15:00	15:10	0:10	【感想共有】 ・手を挙げた生徒数名より感想をもらう	メインセッション

図表3-9 第3回オンライン合同授業活動の様子



3.1.2 放課後探究ゼミ（教育課程外）

■ 実施回数：第1ターム：5月～7月（5回）、第2ターム：10～12月（5回）

■ 実施内容：

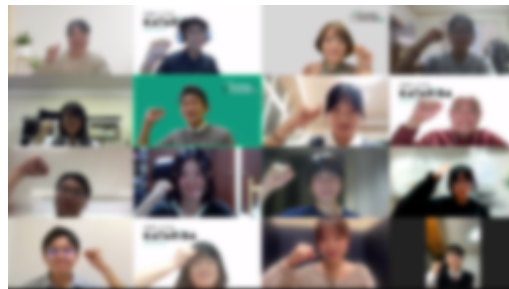
①探究活動の進め方に関するレクチャー

探究活動に取り組んできた大学生による講演等を通じて、テーマの見つけ方／問いの立て方／アクションする方法をインプット

②生徒の活動状況に応じた探究相談

生徒の活動状況に応じてグループをつくり、ファシリテーター役のスタッフや他校の高校生からアドバイスをもらい、探究テーマの決定やアクションプランに関する課題を整理・解決

図表3-10 放課後探究ゼミ活動の様子



3.2 プラットフォーム構築に向けた取り組み

3.2.1 運営ノウハウの蓄積および知見化

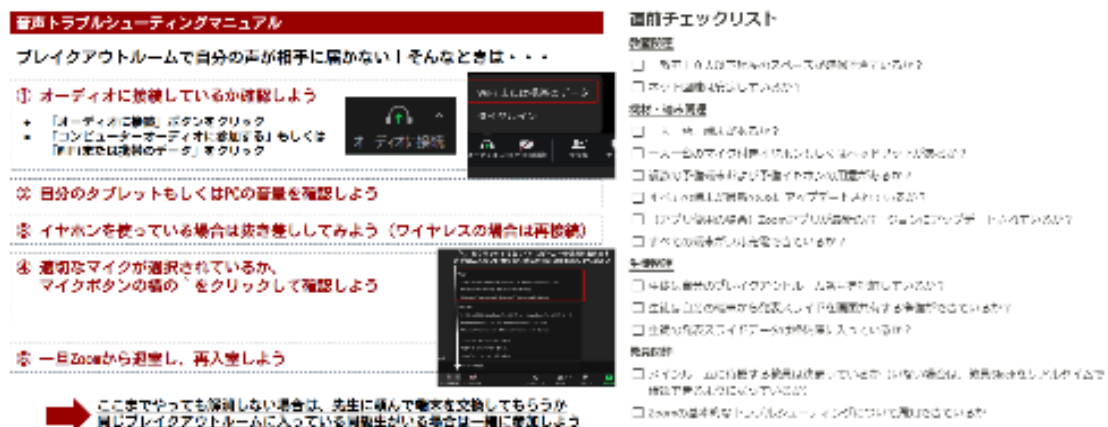
- ・本連携に参加している構成校の教員向けにポータルサイトを構築し、プラットフォームの基盤とした（Notion）。

図表3-11 構成校教員用ポータルサイト



- ・オンライン合同授業の実施手順を運営マニュアルとして資料化し、使用した各種アンケートフォームや様式類をデータで整理した。

図表3-12 オンライン合同授業の運営手順・オンライン活動時のトラブル対応マニュアル等



3.2.2.1 生徒の興味関心（探究テーマ）データベースの構築および個別マッチング

■ 活用の流れ：

- ・構成校生徒にアンケートをGoogleフォームで実施し、探究活動のテーマ進捗状況について情報収集（設問内容：①探究テーマの内容、②そのテーマを選択した理由、③目指していること、④これまでに実践したこと、⑤今後実施したいと考えていること）
- ・収集した情報をスプレッドシート上で一覧化し、カテゴリやキーワード別に検索できるようにした上で、連携校の窓口教員に限定公開
- ・連携校の教員が、自校の生徒と似通ったテーマで探究活動を行う他校生徒を検索し、交流・接続を希望する場合は事務局へ連絡
- ・事務局を通じて相手校側教員・生徒へ打診、了承を得た後メタバース空間での交流活動を実施（授業時間内もしくは放課後）

時期	実施事項
6月～7月	・連携校生徒の探究テーマ回収①
8月	・興味関心一覧データベース作成および構成校への周知
9月	・生徒間交流の実施 ・活用事例の周知（構成校教員に対する情報発信）
10月～11月	・連携校生徒の探究テーマ回収②（前回からの更新事項を確認） ・興味関心一覧データベースへ反映
12月～2月	・生徒間交流の実施 ・活用事例の周知（構成校教員に対する情報発信）

[illegible]

3.2.2.2 メタバースを活用した探究相談部屋

本取り組みの促進のため、メタバースに慣れることを目的に、各校の探究授業時間にメタバース上での探究相談室を開室し、希望する生徒が入室することができる試行を行った。

■ 実施回数：10月～1月 20日開室

■ 利用人数：のべ54名

3.2.2.3 サポーター人材バンクの構築および活用

合同授業に参加したサポーターから希望者を募り、ポータルサイトにプロフィール情報（有する専門性・探究伴走の経験等）を掲載し、生徒もしくは教員から、任意のタイミングでヒアリングやフィードバックの依頼を受け付けた。

■ 登録要件：オンライン合同授業へのサポーター参加者

■ 人材バンク（コアサポーター）登録人数：31名

■ 対応可能テーマ：コアサポーター登録時に、それぞれが対応可能なテーマについてキーワードの登録を行った。令和6年度のコアサポーターは、以下のテーマをカバーしている。

図表3-15 コアサポーター対応可能テーマ

対応可能テーマ	特産品開発／出版・編集／広報・マーケティング／ 過疎地域での移動販売／高齢者福祉／高齢者の居場所・健康／ 障害者支援・就労サポート／LGBTQ／キャリア教育支援／ ユースセンター運営／魅力化コーディネーター／DX／Web3.0／ 主権者教育・シティズンシップ／国際協力／人道支援／ 青年海外協力隊／防災／自然・野外活動／環境教育／日本文化／ 人文学／科学技術・イノベーション政策／臨床哲学／地方創生／ 古民家再生／観光／ラジオパーソナリティ／歌・楽曲・映像制作／ 落語家／手話／フィリピン留学／オーストラリア留学／ コンビニ経営／カフェ経営／キャンプ場経営
---------	---

◆活用の流れ

- ・コアサポーターのプロフィール情報（専門分野・居住地・受付可能な依頼内容等）をポータルサイトへ掲載し、連携校が自由に閲覧できるようにする
- ・連携校に所属する教員もしくは生徒より、専用フォームにて面談希望を随時受付
- ・日程調整・オンライン会議ルームの提供等を事務局が行う

図表3-16 令和6年度の実施の流れ（コアサポーター制度）

時期	実施事項
6月～7月	・オンライン合同授業第1回実施 ・オンライン合同授業第1回へ参加したサポーターに対して企画説明およびコアサポーター登録者募集
8月	・コアサポーターの登録情報回収

	・コアサポーター選択ページ構築（Notion） ・取り組みについて構成校の窓口教員へ周知
9月	・コアサポーター面談の実施 ・活用事例の周知（構成校教員に対する情報発信）
10月～11月	・オンライン合同授業第2回実施 ・オンライン合同授業第2回へ参加したサポーターに対して企画説明およびコアサポーター登録者募集
12月～2月	・コアサポーター面談の実施 ・活用事例の周知（構成校教員に対する情報発信）
1～2月	・オンライン合同授業第3回実施 ・オンライン合同授業第3回へ参加したサポーターに対して企画説明およびコアサポーター登録者募集

図表3-17 構成校ポータルサイト上のコアサポーター検索ページ



3.2.2.4 構成校教員によるナレッジシェア

構成校教員へ探究活動支援における課題意識調査を行い、複数校が共有して持つ悩みや関心の高いトピックを抽出し、該当テーマに関するオンライン研修会を開催

○ 教員向け探究勉強会

今年度、本事業の一環として教員向けの探究勉強会を2回実施した。年度初めのアンケートでは、関係活動における具体的な声かけ方法に課題意識を持つ教員が多かったことから、対話のモデルケースを通じて関係活動の支援方法を考えることをテーマに研修を実施した。

また、構成校における探究活動の進め方が多様であることに加え、構成校の教員から「探究の質向上に向けた学校間交流の場を設定したい」との意見があったことを受け、学習指導要領（総合的な探究の時間）を読み解きながら、自校の探究活動に必要な視点について考える対話形式の座談会を実施した。

①8月7日：夏季集合研修

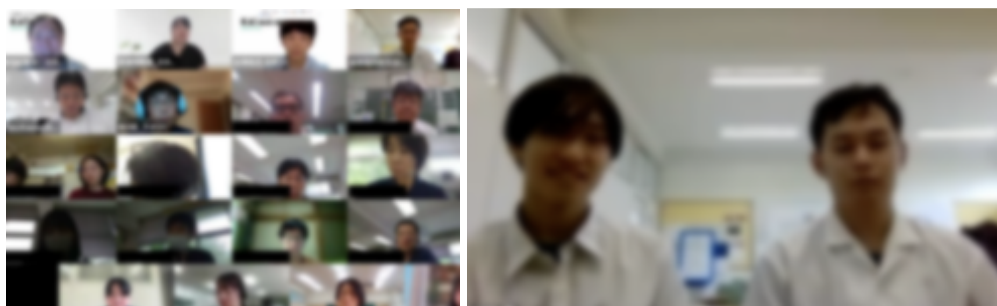
「探究を前に進める伴走支援方法 一対話のモデルケースを通して考える」
 ・構成校の生徒2名に対して、代表教員が対話形式で伴走支援のデモンストレーションを実施。参加者は、デモンストレーション後のモデレーターを交えた質疑応答およびブレイクアウトルームでの議論を通して、探究学習における伴走支援の目的や手法について理解を深めた。

図表3-18 夏季集合研修タイムスケジュール

所要	内容	ポイント
0:07	事務局より挨拶 趣旨説明および登壇者紹介	
0:15	公開伴走一人目 ・生徒Aより探究テーマ共有（約3分） ・「自分ならどう伴走する？」を各自考える（約2分） ・公開伴走 大槌高校教員A（約10分）	＜テーマ＞ 情報の収集・分析およびそれを踏まえた問いの更新（深化）を目指す伴走支援 ＜ポイント＞ ・アンケートで集めた情報の整理・分析 ・問いの更新、定義の明確化 ・次のアクションを明確化
0:15	公開伴走二人目 ・生徒Bより探究テーマ共有（約3分） ・「自分ならどう伴走する？」を各自考える（約2分） ・公開伴走 大槌高校教員B（約10分）	＜テーマ＞ アクションの計画・実行フェーズにおける伴走支援 ＜ポイント＞ ・単にアクションを実行するだけではなく、あくまで「探究学習」の一環として、アクションを通じて何が明らかにできるのかを生徒と共に明確にする ・元々の問いや課題意識が生徒の中で腑に落ちており、実際に起こそうとしているアクションと繋がっているかを再確認する ・ループリック等に照らし合わせ、このアクションを通して生徒のどのような資質能力を伸ばしていきたいのかを意識する
0:05	生徒二人からの感想共有	
0:10	小グループに分かれて自己紹介および感想 &質問の共有	
0:25	パネルトーク（モデレーター進行）	＜想定話題＞ ・どんな意図で声掛けをしたか ・生徒に寄り添いつつも、どのタイミングでこちらのアドバイスを入れているのか ・探究活動の特性をどう見立てているのか
0:10	小グループに分かれて感想の共有	

0:03	諸連絡	
------	-----	--

図表3-19 夏季集合研修活動の様子



②12月12日：教員対話会「学習指導要領から自校の探究を考える」

- ・「総合的な探究の時間」の学習指導要領を読み合わせ、自分の学校における探究活動のヒントを得るとともに、各校で目指している探究活動の理想像について対話し、共通認識を得ることを目指して実施した。

図表3-20 教員対話会タイムスケジュール

所要	内容
0:10	事務局より挨拶・趣旨説明および登壇者紹介
0:15	学習指導要領読み合わせ ・「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編」について、参加者が各々の場所を選び読む
0:25	意見交換①自分の学校の探究活動に必要なと感じたポイント ・読んだ箇所について気になった点や、解釈を深めたいと考えた点を共有
0:25	意見交換②自分の学校の探究活動で今後取り組んでいくべきこと ・自校の探究活動においてできている点・課題である点について話し、今後取り組んでいきたいと思うことについて対話
0:10	振り返り・感想共有

4. 本年度成果および課題の検証

令和6年度の取り組みについて、アンケートおよびインタビューを通じて成果と課題の検証を行った。本章ではその内容を以下に示す。

4.1. 調査概要

図表4-1 調査概要

調査目的	都道府県を超えたオンライン連携には、生徒・教員に対してどのような直接的・間接的効果があるのかを明らかにする。また、来年度に向けたプラットフォーム構築およびプログラム改善に向けた課題を収集する。
調査方法	アンケートおよびインタビュー
調査対象	(1) オンラインを活用した各種連携プログラムに対する評価について・上述の①学校間での探究的な学びの機会の構築・実施および②プラットフォーム構築に向けた取り組みについて、生徒・教員を対象に実施したオンラインプログラムの事後アンケートを実施 (2) オンライン連携を通じた生徒および教員の変化について ①アンケート 生徒：各プログラムに参加した生徒全員 教員：上記生徒の所属する学年団の教員全員 ②インタビュー 生徒：10名（インタビューを依頼した教員の所属校より1名ずつ） 教員：10名（構成校の地方公立小規模校窓口担当者の中から選定） <u>インタビュー対象者の要件：</u> ● 生徒：2024年度「オンライン合同授業」（全3回）に出席した生徒（各校1名）。なお該当者がいる場合には、「オンライン合同授業」以外のプログラム（「放課後マイプロゼミ」「メタバース探究部屋」「生徒間交流」「コアサポーター制度」）いずれかに参加したことのある生徒 ● 教員：窓口教員もしくはそれに順ずる教員（各校1名）。各生徒の様子や状況を把握している教員
調査時期	(1) オンラインを活用した各種連携プログラムに対する評価について・各種プログラム終了後随時 (2) オンライン連携を通じた生徒および教員の変化について ①アンケート：2025年1月～2月 ②インタビュー：2025年1月～3月
参考	<u>調査項目：オンライン連携を通じた生徒および教員の変化について</u> ①アンケート：別添資料を参照（第6章） ②インタビュー：アンケート項目に沿った半構造化インタビュー

4.2. 調査結果

4.2.1 オンラインを活用した各種連携プログラムに対する評価

4.2.1.1 生徒を対象とする取り組み

①オンライン合同授業

図表4-2 オンライン合同授業に対する満足度①

	第1回（6月）	第2回（10月）	第3回（2月）
	割合	割合	割合
とてもよかった	63.6%	62.6%	58.3%
まあまあよかった	31.6%	32.5%	35.7%
あまりよくなかった	3.2%	3.8%	5.2%
よくなかった	1.5%	1.0%	0.9%

図表4-3 オンライン合同授業に対する満足度②

（4 とてもあった ～ 1 全くなかった の4件法）

	第1回(6月)		第2回(10月)		第3回(2月)	
	平均値	肯定回答率	平均値	肯定回答率	平均値	肯定回答率
授業全体を通して、他校生徒やサポーターとの交流を楽しむことができた。	3.60	94.7%	3.59	95.7%	3.53	94.8%
授業全体を通して、自分の考えや気持ちを他校生徒やサポーターに伝えることができた。	3.52	93.0%	3.50	94.1%	3.46	93.0%
これまで取り組んできた探究活動について自分の言葉で説明することができた。	3.55	93.3%	3.52	94.6%	3.46	91.9%
これまで取り組んできた探究活動に自信を持つことができた。	3.39	89.9%	3.41	91.8%	3.32	87.8%
今後の探究活動や自分の将来／進路について新たな視点やアイデアをもらうことができた。	3.46	91.0%	3.50	92.5%	3.33	89.3%

*連携活動を通じた生徒の変化は後述

◆オンライン連携に取り組みやすくなるための要素

オンライン合同授業をうまく生かせる生徒の特徴について、教員に対してインタビューを行った内容を抜粋する。外部とつながることに関心を持ち、難しいことにも前向きに取り組む姿勢を持つ生徒は、オンライン交流をうまく活かしているのではないかという声があった。

一方で、自らアイデアを得たり、助言から発想を広げたりすることに苦手意識を持つ生徒にとっては、難しさがあったのではないかという指摘もあった。

(教員対象インタビュー抜粋)

- 探究のテーマにはよると思うけど、同じようなテーマに興味を持ってることを話してみたりとか、高校生全体っていうところで幅広く意見を聞きたいとか。小規模校ならではの共通点に着目したい子とか、外に興味を持って（最初から持ってなくてもいいかもしれないんですけど）繋がることをきっかけに外への興味を広げられるような感じですかね。（D先生）
- わからないことはわからないとか、進めないっていうことを解決しようとする事ができる生徒だといいいかなと思いますけど。なんとかしなきゃ、という気持ちがあればなんとかなるのかなと思う。（D先生）
- （オンライン交流が）やりにくいっていうふうな感覚を持ってる子たちは、そこまできなかつたのかなとも思うんですけど、どうしても拡散できない子たち、その自分たちのテーマを、こんなこともできるあんなこともできるっていうふうにとんどんそれこそ芽を繋いでいくようなことが苦手な子たち（は難しかったのではないかな）（B先生）

※下線部は作成者による

②生徒の興味関心（探究テーマ）データベースの構築および個別マッチング

構成校の生徒の探究テーマをデータベース上に整理し、類似する探究テーマを持つ生徒同士のマッチングを促した。その結果、令和6年度には、以下の組み合わせによる生徒間交流の実施例が生まれた。

図表4-4 生徒間マッチング事例

探究テーマ	連携校
犬を幸せにする	京都府立須知高等学校、岩手県立大槌高等学校
商品パッケージデザイン①	京都府立須知高等学校、熊本県立小国高等学校
空き家の活用	鳥取県立青谷高等学校、静岡県立川根高等学校
葬祭について	長野県阿南高等学校、長崎県立猶興館高等学校
現代アート	岩手女子高等学校、京都府立須知高等学校
料理/地元食材	岩手県立前沢高等学校、岩手県立大槌高等学校
商品パッケージデザイン②	京都府立須知高等学校、山形県立新庄南高等学校
人口減少地域における交通課題	静岡県立松崎高等学校、静岡県立川根高等学校
作曲活動	京都府立須知高等学校、岩手県立大槌高等学校

生徒間交流を実施した生徒および、該当生徒の探究活動の支援を担当する教員を対象に事後アンケートを実施し、所感を尋ねた。

（生徒 n=17／教員 n=9）

図表4-5 生徒間マッチング（以下では「生徒間交流」）満足度

【生徒】生徒間交流について、あてはまるものを選んでください

非常に満足	58.8%
やや満足	29.4%
どちらともいえない	11.8%

【生徒】今後の生徒間交流について、あてはまるものを選んでください

とてもしたい	58.8%
ややしたい	29.4%
あまりしたくない	11.8%

【教員】今回の生徒間交流について、あてはまるものを選んでください

非常に満足	88.9%
やや満足	11.1%
どちらともいえない	0.0%

【教員】今後の生徒間交流について、あてはまるものを選んでください

とてもさせたい	88.9%
ややさせたい	11.1%
あまりさせたくない	0.0%

◆考察

上記のとおり、生徒・教員ともに生徒間マッチングに対しては高い満足度を示した。一方で、実践事例の創出に向けた運用の中で、以下に挙げるような課題が明らかになった。

（１）生徒のニーズ把握

・探究活動の授業曜日が重複している学校の生徒同士での意見交換を想定していたが、時間が重なる学校同士でも①類似した生徒の組み合わせがない、②テーマが類似していても生徒側に交流ニーズが少ないといった理由により、複数校による共同利用ができる機会が限られた。

（２）教員からの働きかけの必要性

・生徒間交流の実現に至るためには、多くの場合、先生が生徒の状態を見立てて声掛けをし、端末の準備や操作支援を行う必要があった。
・今後は構成校全体で探究授業の曜日および時間帯を可能な限り揃えとともに、生徒の探究活動の状況に関するリアルタイムでの把握が必要である。

③放課後探究ゼミ

◆放課後探究ゼミに参加しての所感

（アンケート自由記述回答抜粋）

- 自分らの学校の仲間の意見だけではなく他校の生徒さんから様々な意見を頂くことが出来てとても良かったです。

- 普段関わることのない人から自分のマイプロに対してアドバイスを沢山もらったことや、少人数のグループに分かれるのでじっくり話すことができたことが良かった
- 自分だけじゃ考えられなかったことも色々な人と、意見を交流する事で新しい発見があった。
- 他校の生徒の方やスタッフの方からアドバイスをもらうことができて自分のアクションの準備が出来たので良かった。
- 小さいことから始めていくのが重要だと知った
- 自分のマイテーマをいいと思ってくれる人がたくさんいたこと。自分以外の高校生も同じようにマイテーマについて悩んでいたこと。もう行動に移している勇氣ある高校生がいること。

◆参加者の特徴

参加した生徒の多くは、「探究活動に対する意欲はあるが、具体的な行動が定まっていな

い」段階であり、探究テーマの方向性や具体的な行動の一步目を考える機会として機能した。

◆オンライン会議システムとメタバースの比較

今回の放課後探究ゼミでは、オンライン会議システムとメタバースを併用して講座を実施した。終了後に生徒にどちらのシステムが使いやすかったかについてアンケートを行った。

(オンライン会議システムはZoom、メタバースはMetaLifeを使用した)

図表4-6 オンライン会議システムとメタバースの比較

どちらのシステムが使いやすかったか

オンライン会議システム	69.2%
メタバース	15.4%
どちらも変わらない	15.4%

(「使いやすい」と答えたシステムについて)理由を教えてください。

オンライン会議システムが使いやすいと答えた生徒の理由(アンケート自由記述抜粋)

- 使い慣れているから(zoomしか利用したことがない)
- 皆の顔が見やすいのと、移動が便利だから
- 操作しやすい

メタバースが使いやすいと答えた生徒の理由(アンケート自由記述抜粋)

- zoomはそちらで班を決めないといけないので、同じような意見の人と話しにくい
- 直接顔が見えないので話すことが気楽にできたから

アンケートの回答結果からは、オンライン会議システムの方が使いやすいと答えた生徒が多かったが、それぞれ異なる利点が認められた。

オンライン会議システムが使いやすいと感じる理由としては、使用経験があることや、参加者の顔が大きく映し出される点が挙げられた。一方で、メタバースを使いやすいと評価した生徒もあり、Zoomでは生徒側からブレイクアウトルームを選べないことや、ルームが開始されるまで移動できないことへの不便さが指摘された。

今回使用したメタバースは、アバター同士が近づくと自動で通話が開始される仕組みであ

り、Zoomと比べて相手の顔が小さく表示される、あるいはカメラをオフにしてもアバターが表示される点が特徴である。そのため、顔を出さずに会話ができることが、参加のハードルを下げていていると感じた生徒もいた。

通信の安定性に関しては、オンライン会議システムの方が優れているという声もあり、気軽に取り組みやすい点ではオンライン会議システムの方が適しているといえる。ただし、グループ活動に積極的に取り組む生徒や、顔を出さずに参加したい生徒にとっては、メタバースの方が活動しやすいという示唆が得られた。

◆考察

上記の通り、放課後の各種プログラムについては、生徒から「それぞれの探究活動を進めるうえでのヒントになった」との所感が多く寄せられた。また、オンライン会議システムとメタバースの併用により、生徒の参加層の違いが見られ、それぞれの媒体を使い分ける必要性が示唆された。実施・運用を通じての課題を以下に示す。

（１）探究活動が進んだ生徒の参加傾向

- ・探究活動に積極的に取り組む生徒は、秋以降になると、オンラインでの意見交換ではなく、現地での活動を優先する傾向が強まった。
- ・探究テーマが固まり、具体的な調査やフィールドワークを進める段階に入ると、探究活動の内容によってはオンラインによる連携の必要性が低下することが示唆された。活動内容に応じて、オンライン活用の方法や場面を整理することで適切な活用が促される。

（２）オンライン交流のニーズの明確化

- ・探究活動に高い意欲を持つ生徒にとっては、より具体的なスキルを学べる場や、専門家からの知見を得られる機会が重要であると考えられる。

④サポーター人材バンクの構築および活用

生徒の探究活動を随時支援する外部人材を「コアサポーター」として募集した。その活用を促進する取り組みの成果と課題を以下に述べる。

令和６年度には、以下の組み合わせによるコアサポーターの活用事例が生まれた。

図表4-7 コアサポーター制度活用事例

テーマ	対応サポーター属性	連携校
LGBTQの理解促進①	大学生	長野県軽井沢高等学校
ゲームを通じた社会課題解決	経営者	岩手県立大槌高等学校
異文化コミュニケーション	大学生（海外留学生）	岩手県立大槌高等学校
ステレオタイプとの向き合い方	大学生	京都府立須知高等学校
フードロス	自営業者	茨城県立小瀬高等学校
買い物難民の解消①	高校コーディネーター	静岡県立松崎高等学校

買い物難民の解消②	自営業者	静岡県立松崎高等学校
漁業体験の開催	会社員（漁師志望）	静岡県立松崎高等学校
LGBTQの理解促進②	大学生	岩手女子高等学校

◆考察

上記のような活用事例の中で、面談を実施した生徒はそれぞれに探究活動の具体的なアイデアを得ることができた。一方で、学校からの自発的な活用には課題が残った。多くの事例では、事務局が各校の生徒の探究活動の内容を確認し、それに合致するテーマや課題意識を持つコアサポーターを学校側に提案するというステップを経て活用に至っていた。年度末が近づき、教員への周知が進んだ段階で、いくつかの学校から自発的なコアサポーター活用の希望が上がるようになった。取り組みの浸透には一定の時間を要したが、令和7年度以降も継続的に事業を進める中で、自発的な活用に至るための具体的な要因を明らかにしていきたい。

また、今年度の教員への聞き取りからは、「生徒の探究活動のテーマや内容が日々変化するため、外部人材とのタイムリーな接続が難しい」との声もあった。生徒間交流と同様に、人材プールを適切に活用するためには、探究活動の支援者が生徒の探究の進捗を把握したうえで、どのような外部人材との接続の選択肢があるのかを認識していることが必要である。この点も含め、次年度以降の継続的な検証課題としたい。

各種オンライン機会の活用について（生徒対象のアンケートより）

上記に挙げた各種オンライン連携の機会については、年度を通じて教員を介して生徒への周知を図ってきた。年度末には、それらの機会が生徒にどの程度認識されていたか、アンケート調査を実施した。

図表4-8 各種オンライン連携機会の認知度

	参加した		存在は知っていたが、参加しなかった		存在を知らなかった	
	回答数	割合%	回答数	割合%	回答数	割合%
メタバース空間体験・カタリバスタッフによる探究プロジェクト相談	83	12.0%	147	21.2%	462	66.8%
生徒間交流（探究テーマが類似する生徒同士による、合同授業以外での個別交流）	120	17.3%	141	20.4%	431	62.3%
放課後探究ゼミ（各自の探究プロジェクトの相談および共有を行う放課後活動）	51	7.4%	177	25.6%	464	67.1%
コアサポーター制度（外部サポーターへのヒアリングおよび探究プロジェクト相談）	36	5.2%	118	17.1%	538	77.7%

合同授業以外のオンライン連携機会について、存在を認識していた生徒は半数弱にとどま

り、生徒に対する活用方法の周知に課題が見られた。関心の近い生徒同士での交流や専門人材との接続を通じた学びには満足感を感じやすいことから、どのような資源がプラットフォーム内にあるのかについての情報を周知するとともに、担当教員も選択肢を把握し、生徒に活用を促せる状態になっていることが必要である。

また、これらのサポートを求める生徒の特徴や、参加する生徒の状態を教員が把握し、適切な支援につなげることが求められる。

4.2.1.2 教員を対象とする取り組み

①構成校教員同士によるナレッジシェア

今年度、構成校教員同士の連携機会として、8月に合同研修、12月に学習指導要領に関する対話座談会を実施した。いずれも、構成校が抱える探究活動に関する具体的な課題の解決に向けて、どのような連携が必要であるかを検討するとともに、構成校における探究活動の考え方を共有することを目的として実施し、各回とも実施後に参加教員を対象としたアンケートを行った。

i) 8月集合研修に対する参加者の声

探究活動に対する声かけの具体的な場면을客観的に見ることで、自らの探究活動支援のあり方を振り返る契機となったという声が多く聞かれた。また、小規模高校という共通の背景を持つ生徒を対象としているからこそ、多様な気づきが促されたという意見も寄せられた。

・ 集合研修参加者：40名

(研修参加者からのアンケート回答)

- 総合的な探究の時間に関しては、他の人の授業を見ることは基本ないので良い機会となりました。先生がどう助言するかの光景を見ることができて良かったです
- 他校の先生方がどのように伴走支援されているのか見ることができ、また、他県の先生方と意見交換ができたのが良かった。
- 探究活動を推進する上で、生徒との伴走のあり方を様々な視点から共有することができ、とても有意義でした。考えさせられました。全職員に参加させたかったと思っています。ありがとうございました。
- 探究活動の先進校である大槌高校の実例や、個々に活躍なさっている先生方の様子に触れる一方で、小規模校ならではの悩みを小部屋で共有し合うことができ、自身を客観的に見ることができた。他の先生方もそうであると良いな、と思います。
- 探究の伴走について、多様な視点での意見を聞くことができた。小規模校ゆえに、校内だけでは視点に多様性が生まれにくいのは、生徒も教員も同じ。
- 他校の先生が実施する探究の指導を見ることができてよかった。イメージができた。いかに自分事にさせるのかを今後も考えていきたい。
- 他校のリアルな伴走の様子を目にする機会は初めてだったので、「自分だったらどう対話しよう」と想像しながら見ることができたし、参加者の様々な視点も知ることができてよかった。
- 伴走する様子を見ることができて良かった。生徒が取り組んでいる活動内容が大きく異なっていたので、どこで活かせるか課題に感じている。

- 生徒と先生のやりとりを見せていただいて、生徒自身の声を聞かせていただけたことが何よりよかったです。いろんな学校の先生方と、探究活動の難しさや生徒の成長をみとる喜びみたいなものを確認できたような気がして、それも嬉しい気持ちです。

ii) 学習指導要領勉強会

探究に取り組む上での課題や工夫について、指導要領の解釈を共有しながら他校との違いや共通点を対話的に捉えることが有意義だったという意見があった。同僚を巻き込むための職員研修の在り方や、教員同士がより親密に連携できる場の必要性を指摘する声も聞かれた。

・ 集合研修参加者：12名

(研修参加者からのアンケート回答)

- 探究に力を入れている(または力を入れようとしている)学校の先生と言うこともあり、学習指導要領にも目を向けている方ばかりだと感じた。
- やはり、いかに同僚を探究に巻き込んでいくかで悩まれている方が多いのかもしれないと感じました。そのためにも職員研修の機会を大事にすることが重要だと思うので、今回のような場をプレ職員研修として位置付けて、自校の職員研修設計の一助にするのがいいのかなと思いました。主担当が読み込んで、噛み砕いて、カリキュラムに落とし込んだものを説明するのではなく、一緒に噛み砕いて、本校の総探とは何か、何を達成したいのかを考えると良いなと思いました。
- 指導要領を読み深めるということが新鮮でした。自己のあり方、生き方を大切にしたいなあと改めて思いました。「どうしたの」「どうしたい」「何か手伝えることあるかな」の問いかけを大事に生徒に向き合いたいです。
- 探究活動の内容について、「学校規模によって異なる。何でかというところだよね。だけど、ここは同じだね。」というお話をもっとしたいなと思いました。例えば、昨日話していて「あ、ここは本校の探究活動と全然違うな。なんでだろう。」「あ、でもここまでは本校の探究活動と同じだ。」「なるほど。この過程が本校と違うのか。」「じゃあこの過程ってもう一回検討しなおしたら本校の探究活動も変わってくるのかな。」と自身の中で対話が生まれておりました。
- 最後に触れていただいたように、せっきやく北海道から長崎までの先生方が交流する機会なので、もっと親密につながることができないかなと考えていました。

◆ 考察

これらの会には、本連携の窓口を担う教員の参加が多く見られた。窓口教員は多くの場合、本事業に参加している学年の探究活動の推進を担当している。それぞれの学校で探究活動の推進に携わる教員が、こうした会に関心を寄せる傾向があったといえる。参加教員の関心は、探究活動における具体的な声かけに関するニーズや、推進担当者として他の教員との合意形成や地域との連携の深め方といったテーマが多く、一定の共通性がみられている。各校の背景がある程度似通っていることから、自校の状況と引きつけながらさまざまな気づきを得られたという声も聞かれた。

一方で、こうした機会が探究活動の推進担当者以外の教員には接続しづらい側面もあった。探究活動では多くの学校で学年団など複数の教員が関与する体制が取られていることから、より多様な立場の教員にとって実践的に役立つ機会を提供することが求められる。

4.2.2 オンライン連携を通じた生徒および教員の変化

本事業においては、オンライン合同授業をはじめとする各種プログラムや教員間の連携を実施してきた。これらのプログラムおよび連携活動全体を通じた、生徒および教員の変化に関する分析と考察を以下に整理する。

4.2.2.1 オンライン連携を通じた生徒の変化

オンライン合同授業への参加を通じて生じた、自身の関係活動に対する具体的な変化を「直接的な効果」とし、加えて、自分自身に関する変化や成長を「間接的な効果」と位置づけ、それぞれについて調査を実施した。生徒に対するアンケートおよびインタビューに加え、教員から見た同様の観点でのデータも併せて提示する。

①生徒の認識：オンライン連携による探究活動および自分自身の変化について

アンケート回答結果（第3回オンライン合同授業の実施後に取得）

図表4-9 生徒から見たオンライン連携による自身の変化

4 とてもあった ～ 1 全くなかった の4件法

	平均値	4	3	2	1	肯定回答率
オンライン合同授業の参加を通じて、自分の探究活動に関して変化がありましたか	2.41	99	148	385	60	35.7%
オンライン合同授業の参加を通じて、自分自身に関して変化や成長がありましたか	2.66	137	211	313	31	50.3%

オンライン合同授業への参加を通じて、探究活動に具体的な変化があったと回答した生徒は全体の約35%であった。また、オンライン合同授業への参加を通じて、自分自身に関する変化や成長を感じた生徒は全体の約50%であった。前章で見たとおり、オンライン合同授業に対する満足度は一定の高さを示しているが、合同授業で得られたアドバイスや助言を、探究活動に具体的な変化として反映させ、生徒自身が意識できる形での成長につなげていくためには、一定の条件整備や支援が求められると考えられる。

インタビューからの考察（第3回オンライン合同授業の実施後に取得）

第3回オンライン合同授業の実施後、構成校および連携校の生徒計10名を対象にインタビューを実施した。そこで語られた内容をもとに、オンライン連携によって探究活動がどのように変容したかについて考察する。

○ オンライン連携による探究活動の変容（直接的効果）

探究内容の多様性への気づき

▶学校により探究のテーマや内容が異なることを知り、他校の生徒のテーマが、その人自身にとってかわりが深い課題であることに気づいたり、他校の生徒がテーマについて焦点化し深く掘り下げている様子に気づき、自分の活動に反映させる

（生徒の語り）

- ・他者の探究活動から刺激を受けるとともに自分の環境を見つめなおすきっかけになった

- オンラインしてみて、それ（テーマ）について考えてみるのもいいかもと思って、1回家に帰って考えました。視野が広がった、探究活動の範囲みたいなのが結構広がったっていう感覚ですね。（Aさん）
- 探究内容がその学校によって全然違うなと思いました。部活に対する疑問とか、勉強に対する思いとか、何かいろいろみんなにもいっぱいあるよなって感じました。（Gさん）
- （他校の探究の話を）聞いててなんていうか、着眼点がすごいなと思った。（他校の探究の話の説明）自分だったら疑問に思いもしないなんていうか、ありふれた普通のことに着眼点を持っているのがいいなって思いました。本当にすごいなって思ったのは、何もないゼロの状態から、何に関心を持って、さっき使う具体的な探究テーマとさせてくださいんですけど、そんな感じで身近なものに興味関心とか不思議だなんていう疑問を抱いて、それを探究テーマに設定して、どうしていこうとか、どう活動していこうっていうのを自分1人で主に決めていって、周りの子の協力とかもいただいていると思うんですけど、1人で活動してるんで、それがすごいなと思ったし、私達の高校との大きな違いかなと思います。（Eさん）
- 同じ学校内だと大体この人はこういうことするみたいなのもわかってるし、探究とかも相談したりとかもあるし、進捗を見せ合ったりするから大体こんな感じかなっていうのはわかってたんですけど。「マグナカルタが世界に与えた影響について」とかの着眼点から、自分では思いつかないようなことで、多分私と同じ学校の人もそういうのをやろうとはしてる人がいなかったから、全然違うところの人の発表を聞いたら、予想してたのとは全然違う話が聞けたりするから面白かったです。（Iさん）

他校の生徒の意見による探究活動の深まり

▶他校の生徒との交流により、学校内ではなかった意見を受け、自分の探究活動を客観的に見直したり、視野を広げ改善するきっかけになる

（生徒の語り）

- ・ 他校の生徒からの意見が自身の探究を深めることにつながった
 - 他校の人に、やっぱり動物のこととかについて詳しく知らない人とか、そういうの難しいんじゃないとか、そういうのはどうかなって言われました。何か改善できることないかなって思って、その友達とかに協力してもらったり、やっぱりいろんなそういう活動をした人たちに話を聞いてみたりしました。第2回の交流で他校生徒から言われた言葉を受けて、そこからより深まった感じ。（Aさん）
- ・ 他校の生徒と交流することで、普段の授業では得られない新たな視点を得ることができた
 - 普通の探究の授業では、自分の探究のテーマを、クラスの友達は知ってるので、あんまりその新しい発見というか、ヒントは得られることは少ないんですけど、オンライン授業だと全く知らない人と話して、探究を発表するので、そこで新しい発見が得られるので、そういう面ではオンライン授業がいいなと思います。（Bさん）
- ・ 他校の生徒と交流することで、自分の探究を広げることができた
 - 他の人と交流して、あとデザインのことを全く知らない人からのアドバイスをもらうことで、全然違う方角に行くことによってわかることがあったんで、そういうとこかなと思います。（Hさん）

発表の仕方の変容

▶他校の生徒に自分の探究について発表する機会によって、自分の探究に詳しく知らない相手に分かりやすく伝えるよう発表の仕方を改善する

(生徒の語り)

- ・オンライン合同授業では、自分の探究について詳しく知らない相手に、限られた時間の中で、分かりやすく伝えることが重要であることに気づいた
 - 1からちゃんと相手に何も知らない相手にいかにわかりやすく伝えるかみたいとか、合同授業じゃないと得られなかった力かなど。初めの方なんかは校内で発表するときみたいな感じで伝わるだろうと思って、結構省きながら発表したんですけど、これどういうことなんというのか、増えたりとか。あとはITの発表とか聞いて、こういうとこちゃんと説明しないとやっぱりわからないんだな、みたいなことを学べたのでそれが合同授業と学校内の活動との違いだなと個人的には思いました。(Eさん)
 - あとは自分の探究を他の人に伝えるのってすごい難しいことだと思うんですけど、それでも授業ってなると、やっぱりやんなきゃなっていうことになると思うので、その点からやっぱ大事だなと思ってます。(Fさん)
- ・他校の生徒の探究について、意見を伝えたり、質問をする力が身に付いた
 - 教室の人だったら何回か自分の発表聞いてくれてて、ある程度はその内容について理解してくれてるなって感じるんですけど、他校の人は初見で何か難しい感じとかもしてるわけじゃないですか。より詳しく簡単に言わないといけないなっていうのが違いだと思います。探究のときも他人に話すときに、短い時間で自分の思ってること全部使わないといけないんじゃないですか。その短い時間でどうやって自分の意見を伝えるかっていうのは、そういう能力は結構ついたんじゃないかなと思います。(Gさん)
- ・他校の生徒から質問を受けることで、発表内容の不足について気づき、発表の仕方を改善することができた
 - 「この点についてはどうなんですか？」とか自分が完全だって思ってた探究の項目でも、この項目を増やしたら初めて見た人はわかりやすいんだとか。質問を受けることによって、同じ地域の中だったら伝わることも全然地名とか知らない人から見たら「これは何だろう？」となるから、こういうところを補足した方がより多くの人に伝わりやすい探究になるんだとか、そういう気づきがありました。(Iさん)

○ オンライン連携による生徒自身の変容(間接的効果)

コミュニケーションや他者理解への積極性

▶自分のことを全く知らない他者に対して探究活動について発表することで、実践的なコミュニケーション能力を向上させる機会となる

(生徒の語り)

- ・初対面の人とも積極的に話すことができるようになり、相手について知ろうとするようになった
 - 初対面の人でも割と話せるようになった。ていうこです。ね。相手の何か地域のことを聞いてみようとか、相手を知ろうって思いになりました。(Dさん)

・初対面の相手に自分の探究について伝えることを通して、説明する力や言語化する力が身に付いた

- 何も知らない人たちに1から自分の活動について、いかに相手にわかりやすく説明したりとかそのためのスライドを作ったりとか、自己アピール、将来面接とか、仕事とかで結構役立つんじゃないかなと思う自己アピールとか、相手にいかにわかりやすく表現するか、なんていう力が一番合同授業で身についた力かなと思います。（Eさん）
- 変わったところは喋りかな。今まで自分は説明ベタとかで、全然うまく使えなかったりとかしたんすけど、今になっては伝えるっていう技術は上がった気がします。なんか自分の喋り方に対して環境ごと慣れちゃった感じがしちゃって、伸びる感じなかったんすけど。やっぱり新しい環境になって上がったって感じですかね。（Fさん）
- 相手に伝える能力だと思います。何か発表するときやっぱり、結構難しくないですか、言葉を相手に伝えるので。1年前とかは他校の人と交流する機会がなかったんで、そういう力を別につける必要がなかったなと思うんで。こういう交流があったからこそそういう力が伸びていくんやなと思います。（Gさん）

多様な価値観に対する気づき

▶今の生活環境では持ちえない価値観や考え方に触れるきっかけになる

（生徒の語り）

- ・普段、得られない新しい価値観や考え方に触れることができた
 - 新しい価値観や考え方を知る。今の自分が住んでる地域だと難しかった。すごい目新しいっていう感じがしました。（Dさん）
 - 考え方の違いやと思いますし、都会に住んでる人と田舎に住んでる人って、何か生活って絶対違うじゃないですか。違った生活の中で生まれてくる考え方が結構出ると思うんで、そういうところを知れる機会ではあるなと思います。（Gさん）

②教員の認識：オンライン連携による生徒の変化について

オンライン連携を通じた探究活動の変化および生徒の成長について、教員にも同様の観点でアンケートおよびインタビューを実施した。

アンケート回答結果（第3回オンライン合同授業の実施後に取得）

図表4-10 教員から見たオンライン連携による生徒の変化
4 とてもあった ～ 1 全くなかった の4件法

	平均値	4	3	2	1	肯定回答率
本事業への参加を通じて、生徒の探究活動に関して変化がありましたか	2.87	6	30	10	1	76.6%
本事業への参加を通じて、生徒自身に変化や成長がありましたか	2.96	8	30	8	1	80.9%

本事業への参加を通じて、生徒の探究活動に関して変化がありましたか（自由記述）

カテゴリ	回答例
------	-----

探究活動の深化・視点の広がり	● オンライン交流を通して、異なる考え方を学び、他者にアンケートを実施したり、インタビューを実施したりして、調査・分析をする生徒が増えた ● 自分の学校で行われているテーマ以外の探究に触れることで、視点を広げることができた。 ● 他校の高校生のプロジェクトがどのようなものか知ること、客観的に考えることができ、自分ごとになったように見受けられた。 ● 分析する方法や理由などを考えるようになった。 ● サポーターや生徒と交流することで、自身の探究を見直した生徒がたくさんいたと思います。 ● 時間を見ながら発表したり、相手の発表を聞きながらメモしたり質問したりする、ライブ感のある中での探究活動であった点は非常に生徒の成長に繋がった。 ● オンラインで発表する経験値。町外の人をどう巻き込むか、町外の人から見たらどう見えるか、などと視野が広がった。
積極性・協働意識の向上	● 何事にも興味を持って取り組むようになった。 ● 他校の生徒の発表を聞いて、自分たちも頑張ろうと一致団結していた ● 物事を前向きにとらえるようになった生徒は増えた。 ● 普段なかなか発言できなかったり、消極的な生徒も個人として参加することで、精一杯の自分を表現し努力を感じた。
コミュニケーション能力の向上	● (特に質疑応答の場面で)相手に対してどのように伝えたら良いのか、伝え方を工夫していた。 ● 「今度はこっちからの視点で考えてみよう！」というように、以前より活発にコミュニケーションをとるようになった ● 複数回の発表や質疑応答を通して、表現力や対応力が高まった。 ● 他校の生徒のがんばりが刺激になって「自分も頑張ろう」と感じた生徒が複数いた。
計画性・実行力の向上	● 発表に間に合うために、スライド制作の日程を決めることができました。 ● 問いを立てることの難しさ、探究の進行で行き詰っていた生徒が主体的に進められるようになった。 ● 自分に興味のある分野を見つけ、些細なところで探究するネタを探しながら、課題を解決していく動きをする生徒が増えた。 ● 他校生徒やサポーターからのアドバイスが探究活動に活かされる場面があった。 ● 探究活動に対する意欲が高まったように見えましたが、次にやることのイメージが明確に出てきやすかったのではないかと思います。

インタビューからの考察（第3回オンライン合同授業の実施後に取得）

第3回オンライン合同授業の実施後、構成校および連携校の教員計10名を対象にインタビューを実施した。そこで語られた内容をもとに、オンライン連携によって探究活動がどのように変容したかについて考察する。

○ オンライン連携による探究活動の変容（直接的効果）

探究の深まり

▶他校の生徒からの意見や他校の探究活動について知ること、自分の探究活動について、問いを深めたり、自校にはない視点を獲得

・他校の生徒の発表を受けて自分の探究の課題点に気づき、問いを深めることができるようになった

- （他校の生徒が）「こんな考えをしてるんだ」というふうには、みんなそれぞれ多分、思うと思うんですよ。でも、やっぱり問いを何回も深めてないのだと、やっぱり生徒自身が相手の発表を見て内容が薄いつけみたいなことを言ったりしてたから、そういう視点でやっぱり見れるようになってるんじゃないかなって思っていました。たぶん探究で問いってというふうには考えている癖はついてるというか、その聞いたことに対して何かこう、問いを新しく、問いをこう立てていくっていうのができてきた子がいるし。（A先生）

- （合同授業で）いろんなアドバイスをもらって、これやってみようと思えるというか、今は世界で〇〇が活躍するために何の要素が足りないのかみたいなことを考えようと思って、世界で活躍する〇〇の何かイメージ企画を作りたいって言って、面白いと思っ

・他校の生徒の意見を受けて、自校にはない視点を取り入れる重要性に気づいた

- （合同授業を通して）自分の高校にはない視点を求めなきゃ、結局うちうちで防災取り組んでも仕方ないみたいなふうには気づいて、それ以降は他の人の意見というか、町の人にもそうですけど県内の他の高校生はどう考えてるのかなっていうような視点を持って活動はするようになっていったかなっていうふうには感じています。（E先生）

探究に関する行動の変化

▶他校の生徒の探究内容について知ること、情報収集（探究活動の仕方）について見直したり（運用）、自身の探究活動に新たな視点を取り入れていることが分かった

・他校の生徒の探究活動について知り、インターネットで調べた情報だけではなく、インタビューやアンケートなどで、自ら情報収集をすることの重要性に気づいた

- 他校の生徒さんと交流をする中で、自分の探究のサイクルを回していく中で、人にもっといろんな話を聞けば面白いものが得られるぞということに気づいた上で地元の葬祭業に勝手に足を運んで、インターンシップみたいなものを自分で取り付けて、動いてくれたりしまして。そこで、ただ単にネットとかで調べるだけではわからないような生の声っていうものを得て、それがとっても大事なことだっていうことにも気づけたっていうふうな印象は受けますね。（B先生）
- そうですね、生徒の様子を見てても、こういうことを学んだとか、あっちだったらこんなことができるんだねとか、近くにそういうのがあるんだとか、アンケートとったらどうなるみたいな話とかしてるのを聞いてると、そうだよみたいなの。（F先生）

・他校の生徒の発表に刺激を受け、自分の発表について振り返り、次の発表機会までに、発表内容やスライドを修正していた

- いろいろ他者のスライド見て、すごかったとか、同じこと考えてる人がいたとか。どうだったって聞いたら、自分と同じこと考えてる人がいてって、〇〇町の産物を使ってうまく利活用してる学校さんがあったってことを伝えてくれたので、そのためには自分は何が必要かみたいなのを考えた結果、そういう行動（発表内容を合同授業での発表を受けて変える）に出たんじゃないかなっていうのが、私の中の振り返りですね。すごく素敵なスライドになっててびっくりしました。（F先生）

探究のテーマの変化

▶他校の生徒と交流することで探究テーマを知り、探究活動のテーマやその掘り下げ方について、視野が広がる

・他校の生徒との交流で、探究のテーマやそのテーマの掘り下げ方について、柔軟に考えられるようになった

- 1年生で地方創生プロジェクトの探究をしていた生徒が、ちょっと角ばった感じで少し難しいことに挑戦するってというようなマインドで探究をやってたんだけど、2年生になって些細なこととか身近なこととかから探究できるんだっていうような考え方を覚えてくれたということ。（J先生）
- 他校さんでそういうことやっているんだって、こういうふうに考えてるんだ、という、そういう経験値が上がったっていうか、自分が活用できたっていうのはまた別だとは思いますが、（テーマについて）少し視野広がってきたのかなっていう感じがします。（C先生）

生徒のモチベーション向上

▶他校の生徒との交流は、探究活動を主体的かつ意欲的に進めるきっかけになる

・他校の生徒の意見により探究活動をすすめることで、探究活動に主体的に取り組むことができるようになった

- 生徒間で言われる方がスタートしやすいっていうか、やらされてないっていうのかな、生徒同士の方が強制感がないので、何か自分たちで探究してるっていう意識は強いのかなと思いました。（E先生）
- ・自校では同様のテーマを扱っている同級生がいなかったが、合同授業でつながり、話をすることで探究活動のモチベーションになった
- （ある生徒について）自分がこの後探究しようと思っている内容は、（自校だと）他者に受け入れられないと思ってたんですよね。あまりその生徒自身が、自分よがりっていうか、あんまりそういうのに着眼してる人っていないんじゃないかと思ったら、（合同授業で）ドンピシャリの子がいて同じで、グループの中で同じグループの中に全く同じ子がいて、ハイテンションぶりはすごかったです。その子が考えていたり共鳴した部分もあって、それがすごくなっていうか、同じことを考えてる人がいて、ちょっとその力になったみたいな感じで。（E先生）

○ オンライン連携による生徒自身の変容（間接的効果）

コミュニケーション能力の向上

▶他校生徒との交流が実践的なコミュニケーション能力を向上させる機会となっている

・他校の生徒と交流することで、初対面の相手に説明する力や質問する力、初対面の人と関係を構築する力が身についた

- この〇〇人（クラスの人数）がいつも中の人たちと相談で意見交換とかできるんですけど、やっぱり外に発信するとか、外の人に聞くってことがなかなかないので、この3回の他校との交の中で、自分の事を知らない人に関係について説明する力だったり、相手に質問してみる力だったり、ウォーミングアップで関係を築く力だったり、最初よりは全然ついたかなと思っています。（G先生）

・サポーターの関わり方から、グループワークやファシリテーションを学ぶことができ、実際の授業でも応用が見られた

- 大人の方の意見もいただくことによって、グループの進め方やファシリテートを学んでいたように思う。司会進行する人を決めた経験などを通して、ファシリテートを学びながら、グループワークの手法を実際の授業でそれを応用して使っていた生徒もいたし、探究のことを踏まえて自分たちはこう思ったけど、他の地方の人たちとか都道府県の子たちはこういうふうに教えてくれたっていうふうにそういう見方もあるんだなっていうことがやっぱり変化としてあったし（J先生）

・初対面の人と話すことに慣れ、コミュニケーションに対する苦手意識が低くなった

- （合同授業を）3回経験する中で、全体的に見てあまりびびらずに話をできるようになったっていうか。そもそも苦手だった子も中にはいるんで。それがやっぱり経験値が上がったってことなのかなとは思いますがね。 3回を経験して慣れてきたという感じです。（C先生）

オンライン合同授業を通じて探究が深まった事例（教員インタビューより）

教員インタビューにおいて、オンライン合同授業をきっかけに外部とのつながりの重要性に気づき、探究活動の取り組みに変化がみられた生徒の事例が複数語られた。

①葬祭業界について探究していた生徒

・オンライン合同授業をきっかけに、「人にもっといろんな話を聞けば面白いものが得られる」「ネットで調べるだけではわからないような生の声を得ることが重要」ということに気づき、地元の葬祭業者へのヒアリング等に足を運ぶようになった。

②ダンスを通じた地元の発信方法について探究していた生徒

・オンライン合同授業をきっかけに、発信するためにもっといろんなところに足を運ぶように行動が変化していった。人と関わりを持つことで自分の理解が深まると気づき、活動が促進された。

③ジェンダー意識について探究していた生徒（グループ）

・オンライン合同授業参加後、外部とつながり意見をもらうことの必要性を実感する。その後、地元大学との連携事業について紹介を受けた際に参加した。それがきっかけで県内の他校生徒とつながりができ、独自にオンラインでの連携機会を設けて意見交換等を行った。

考察：オンライン合同授業による探究活動の変化について

オンライン合同授業は、生徒の探究活動への意欲を高める取組として一定の効果を発揮すると思われる。大部分の生徒がオンライン連携を通じて探究活動に何らかのヒントを得たと回答した。他地域生徒との活動を通じて、自らの探究活動のテーマや周囲の環境を見直し、自分の状況を相対化する機会となり、探究活動の変化につながる一つのきっかけになっていると考えられる。一方、前述のプログラム評価で挙げた通り、探究活動に具体的な変化があったと回答した生徒は全体の約35%であった。合同授業で得られたアドバイスや助言を、探究活動に具体的な変化として反映させ、生徒自身が意識できる形での成長につなげていくためには、一定の条件整備や支援が求められると考えられる。

探究活動の具体的な変化につながる道筋としては、①他校生徒やサポーターから具体的なアイデアを得て、それを行動につなげたケース、②合同活動をきっかけに、他者とつながる意義を感じたり、対人関係への抵抗感が薄れることで、探究活動が発展したケースが考えられる。

今後、オンライン授業の効果を高めるためには、①具体的なアクションに向けたアイデアを得られる運営の工夫および②得たアイデアを探究活動に活かすためのフォローアップについて工夫していく必要があるだろう。たとえば、今年度の合同授業においては、活動するときのグループを生徒4～5名で固定した。1人1台でそれぞれの生徒が発話するきっかけをつくることを企図してのものであるが、来年度はグループ編成の際、ブレイクアウトごとの人数の偏りが生じたとしても、テーマの共有性を優先した編成を行うといったことも考えられる。

4.2.2.2 オンライン連携を通じた教員の変化

ここからはオンライン連携を通じた教員自身の変化について、分析および考察を整理する。オンライン連携を通じて生じる、教員の探究への関わり方に関する意識・行動面の変化を「直接的变化」とし、また連携を通じて生じるそれ以外の変化を「間接的变化」と位置づける。

アンケート回答結果（第3回オンライン合同授業の実施後に取得）

図表4-11 教員から見たオンライン連携による自身の変化

4 とてもあった ～ 1 全くなかった の4件法

	平均値	4	3	2	1	肯定回答率
本事業への参加を通じて、先生ご自身の探究活動への関わり方に関して変化がありましたか	2.77	7	23	16	1	63.8%
本事業への参加を通じて、探究活動に関すること以外でご自身に変化がありましたか	2.47	4	15	27	1	40.4%

ご自身の探究活動への関わり方に関してどのような変化がありましたか（自由記述回答）

	代表的な回答
伴走支援の引き出しが増える	- アドバイスについて参考になった。 - 他校の取り組みを参考にしながら、自校の授業に活かした。 - 先生たちの勉強会や相談会に参加させていただき、生徒に自信を

	持って話すことができるようになりました。
伴走支援のあり方の見直し	● 伴走のありかた、探究活動の考え方が柔軟になった気がします。 ● 「自分が〇〇の立場なら何と質問するかな」ということを考えながら、ブレイクアウトルームを回っていた。あらゆる立場から生徒に質問することの重要性を自覚した。 ● 担当しているグループの活動をよりよくするために、もっと調べたりしようと思った。 ● 学校独自で完結せず、このような方法もあるのだと参考になった。 ● 生徒と一緒に取り組むようになった。
多様な支援者の活用	● いい意味で担任や副担任のみで探究を背負い込まずに、「合同授業で聞いてみたら？」などと生徒の選択肢を増やすことができ、教員の負担感の軽減にもつながった。
マイルストーンとしての活用	● 年間計画立てる時に、指標になってありがたいです。 ● スライド作り、発表の日程を合わせる事ができました。
ICT活用	● 直接の参加はしなかったが、ICTを用いてつながりをもつ学習方法について認識を深めた。

インタビューからの考察（第3回オンライン合同授業の実施後に取得）

第3回オンライン合同授業の実施後、教員計10名を対象にインタビューを実施した。そこで語られた内容をもとに考察する。

○オンライン連携による探究活動への関わり方の変容（直接的効果）

探究資源への接続

▶合同授業によって、探究活動における接続先として多様なフィールドを対象とする選択肢が生じた。また、他校連携によって外部とのつながりが得られることが教員の負担感を下げる側面があることが示唆された

- ・ 探究活動のフィールドとしてオンラインの繋がりを活かす選択肢が生まれる
 - 何かをやるといったときに地域の中だけでやると考えていて、どうやって地域に繋げようかということばかり考えていたが、今回のを見ている限りでは自分の町にはつながらなくても他の学校の地域ではマッチングするようなこともあるかも。（F先生）
 - 外に取材に行くとか、専門家に話を聞くとか、そういうのを必ずやらせようっていうのが元々あったんですけど、それにプラスして同世代とか小規模校とか全国的な繋がりとかができるんだよ、ということで他の先生方も視野が広がったというか。他校の生徒に声を聞いてもいいんだよ、みたいな可能性があるということ、やり方があるのは多分理解してもらえたのではないかな。（D先生）
- ・ 合同授業で生徒同士、交流する機会を設けることで、生徒自ら学びを得ることができた。地理的にも制約がある小規模校でも簡単に外部とつながり、教員の負担も減った。
 - 自分としては正直すごく楽になった。生徒同士がこの機会があるから交流しておいでってなんですか、送り出せば、すごくそこでそれぞれが収穫を得て帰ってこれるので、う

ちの高校の地理的にもその意見求めておいで、っていうのが難しかったりして。オンラインでいくらでもできるんですけど、一番ハードルが低い状態にしてもらって、3回の発表できたのですごく私個人は助かった。（E先生）

指導方法の改善

▶教員自身の考え方や指導方法を見直すきっかけになった

・探究活動の様子や支援者の声のかけ方等を目にするなかで、自校における探究活動の在り方や指導を振り返った。

- 自校以外の大人とからいいフィードバックをもらえて、いいなと思いましたし、それ見て私も英語系だったり国際系の探究してる子にはちょっとなんか、なんていうんですかねいい声かけができるんじゃないかな自分もって思ったので。（G先生）

・他校の生徒の探究活動を知ること、指導方法の違いを知った。また、自校の生徒に不足していることが分かり、指導について考えることができた。

- 他校の生徒さんの探究をいろいろ見れたのは面白かったなと思いますし、やり方が学校によって違って、こんなふうに指導されてるんだってわかったのも面白かったですね。…他の学校ですごい生徒探究の最初に論文とか、ちゃんとした文献から拾ってきて始めましたみたいな、生徒たちがいて。今、本校の探究はみんなネットで調べてペタッて貼って始めるみたいな感じなので、本だったり論文だったりを読むことはなくて、その力が足りないなと思って。「本を1個入れな、参考文献に」みたいな指導はしたんですけど、全員ができたわけではないんですけど、というのはありましたね。（G先生）

○ オンライン連携による教員自身の変容（間接的効果）

生徒の新たな一面への発見

▶生徒の意外な一面や頼もしさについて気づくきっかけになった

- この子はこういうふうに最初に出会った子にこういうふうに接するんだなっていうのが意外に見れて楽しかった。あの生徒たちも自分でこうできるところはできるんだなって。こう頼もしさが見えたというか。（A先生）
- クラスで友達と積極的にコミュニケーションっていうようなタイプではない生徒、発表で初めての子にどうかなっていうふうに思っていて、不安で申し送りのところで…やっぱり初対面の人にすごく話すんだなというのは、変容というか発見があったところですね。（E先生）
- （生徒の探究活動を）コーディネートしなきゃっていうのがすごい私の中にはあって、生徒から出てきてると思うものは拾いながら、友達同士をマッチングさせて、同じテーマで走らせようみたいな、使命感もあったんですけど。正直、（生徒を）見てたら意外と私が勝手に決めつけてただけで、1人でこの子いけるかもとか、もうちょっと柔軟でもでもいいのかなって言う気がしました。そういう意味では生徒の見方も変わったし（F先生）

新しいことを取り込むことへの抵抗感の低減

▶外部と連携することが、生徒の探究にとって重要だということを再認識し、カタリバ以外の外部機関との連携を積極的に行ったり、外部連携への抵抗感がなくなる

・合同授業で他校とのつながりが当たり前となり、外部連携への抵抗感が減った

- 生徒は他校さんをつながる。我々（教員）は事前の打ち合わせだったりとか、振り返りの場面でいろいろやり取りする。そういうことが当たり前になってくれば、外部と繋がることへの抵抗感というのもなくなくなるんだろうと。どうしても学校って、学校の中で完結してしまいがちになるので。特に普通科は外と繋がると言っても、学習面で繋がるってことはなかなかないので。そういう意味では、抵抗感なく人と接するようになってきたこと、あとは学びのフィールドを学校のその建物の中じゃなくて、もう少し外に設けましょうっていうことを、私としてはそういう感じは持てました。学校としてということではないが。（C先生）

・オンライン連携の経験から積極的に外部連携をすることの重要性を実感した。生徒に対しては外部とつながることを薦めている。

- 自分もいろんなところに出て行って町役場とも1年生が連携したり、町も外とと繋がってるので、そこから大学の先生とまた繋がったり企業と繋がったりとかして。これまでに自分は大きな学校の進学校でやってたようなのとは違う経験をいっぱいさせてもらってるので、学校外の方々と繋がるとすごく可能性が広がるんだなって、こんなちっちゃい島の中にいながらも。それを自分は感じてて、子供たちにもそれを話をしている。（I先生）

ICTリテラシーの向上

▶合同授業でICTを活用することで、学校内でICT活用が促進されるきっかけになる

・以前はICT機器を活用できなかったが、合同授業をきっかけにオンラインの便利さを実感し、今ではICTを活用している

- こうやってオンラインとかタブレット使った授業とか、2年前の前任校では3年生を担当しながら進路指導をしていたので、3年生送り出してからようやくロイロ使ったとか、トライアルをしてきました。その辺からようやくやり始めたんですよ。タブレットなんか使いこなせなくて、電子黒板があっても授業で使えなくて、もうパソコン駄目で、Zoomなんかも全然わかんなくてっていうのを若い先生に聞いていろんなことを教えてもらって、面白いなともやり始めて。…「なんか便利だな、世の中すごいな」と思いながら。…どうしても凝り固まってしまうので。なんかすごくいろんな意味で刺激を受けました。（I先生）

・合同授業を通して、教員のzoomの活用スキルが向上した。経験が少ない先生たちも回を重ねることで、スムーズにzoomを使えるようになった。

- 探究とはちょっと関係ないんですけど、Zoomのやり方とかを先生方みんな知ってくれたかなと思います。日頃あんまりZoomはこれまで使う機会が少なかったっていう感じです。多分研修とか1年目2年目3年目とかまではあるんですけど、もっとベテランの先生方になると、やっぱり使ってなくて。1回目のときは、私とかがみんなの確認するって感じ

だったんですけど、たまに抜けちゃったことが落ちちゃったことか。はい、3回目は全然勝手にやってくださってて、みんなZoom使えると思います。（G先生）

考察：オンライン連携を通じた教員の意識について

他校との連携を通じて、教員の意識にも変化が見られた。他校の生徒の探究活動の様子に触れることで、自校の探究支援のあり方を見直す契機となるとともに、具体的な支援方法の引き出しを増やすといった様子が確認された。また、外部との接点が生まれることで、探究活動の支援を学校や周辺地域のみで抱え込まずに進めるべきだと考えるようになったり、対外的な発表機会が生徒の動機付けとなることを認識するようになるといった声も聞かれた。

教員の変化には、生徒と同様に、①探究活動の支援に関する具体的な知見を得るケースと、②オンライン連携活動をきっかけに探究に関する意識の変化が促されるケースがあると考えられる。これまで外部とのつながりが少なかった教員にとっては、県境を超えたオンライン連携がはじめてに近い外部連携の機会であり、変化の度合いが大きくなる可能性がある。

また、他校の取組について主体的にやりとりを行った教員や、担当窓口として他校生徒の探究活動に多く関わった教員ほど、意識の変化が生じる可能性が高い。

これらを促すためには、連携に参加する教員が他校の生徒や教員と交流し、自校との違いや共通点を感じる機会を増やすことが必要であると思われる。

4.2.3 探究活動に関する課題意識および本ネットワークの意義

探究活動の支援にあたり、各構成校が課題として感じていることを調査した。

4.2.3.1 探究活動に関する各校の課題意識

図表4-12 探究活動の支援において課題を感じていること
(教員の回答：選択式／回答数=47)

項目	回答数
探究伴走（モチベーションの維持・向上）	34件/47
探究伴走（課題・テーマの設定）	29件/47
探究伴走（情報の整理・分析）	21件/47
探究伴走（情報収集）	20件/47
外部との連携・協力	17件/47
校内での探究活動に関する理解	15件/47
カリキュラムの設計	13件/47
探究伴走（まとめ・発表）	13件/47
評価基準の設定	13件/47

4.2.3.2 立地条件により生じる課題

テーマの偏り

▶周辺産業等の状況により、探究活動の題材にしやすいテーマがある一方、特定のテーマに偏ることがある

- 学校を横断すると広くできるのかなってというのが、感覚としてはありますね。テーマが偏るっていう地域の方のデメリットじゃないですけど、そういう部分もこういう機会を通して、視点の偏りがなくなるというか、広く見れるってのはすごい意義があるかなって思います。（E先生）

外部資源（リソース）の不足

▶生徒の探究活動にあわせて接続する資源が周辺地域に見当たらず、支援に困難を抱える場合がある

- 子どもたちがもっと『こういうふうなことをしたいです』って言うてくれば、『そうだね、こんなふうに繋げていこうか、この地域にこういうふうな人がいるから』とか、『地元のこういうふうな企業さん等とか、学生さんと繋いでいったらいいんじゃない』っていうふうな話ができたりするんですけど、例えばそういったいわゆるリソースが地域に全くない状況であれば、こちらとしても伴走はなかなかできない部分、ファシリテーターとして入るけど、机上の空論で終わりそうだから現実的に地域のこの辺の人ぐらいしかこっちは紹介できないかなみたいな、っていう伴走の仕方になってしまいかねないので、地方の学校のちょっと難しいところだろうなと（E先生）

情報の格差や偏り

▶小規模校は、情報や機会へのアクセスが制限されている。例えば、地域住民へのアンケート調査では回答者に偏りが生じる。また、距離的問題で、他地域へのアクセスが容易でなく、各種機会や情報へのアクセスがしにくい

- ・ アンケート回答者等の情報収集先が決まった人・ツールになりがちである
 - （調査やヒアリングの対象者等が）大体決まった層で、だから決まった人にアンケートを毎回取るみたいな、そこも難しさの一つかなと。（E先生）…制約されるのは他の地域に行くまでの時間と公共交通機関がほぼない。ほぼないというか乏しいので難しいこと。（E先生）
 - 市内とかにいれば、行けばいろんなことが調べられるのに、調べられないというのはあります。探究に限らず思うことは多い。問題集もない。例えば、本屋さんがそもそもない。ネットで買える時代ではあるけど、勉強してて入試で必要とかなったら、赤本とかも届くの時間に時間かかるし。都市部だったらすぐにも買えるじゃないですか。そういうところから始まって、本当に欲しいものがすぐ手に入らなかったり、欲しいという情報がすぐできなかったりっていうのはあるなと思います。だいぶネットによって解消されてると思うんですけど。

- 探究に限らずなんですけど、少ない人数の中で刺激がなくて、狭い人間関係だから批評とかもお互いにできないし、すごく面白い探究だったけど小中学校と同じようなテーマだったりとか、自分たちでは掘り下げられなかったりとかはある。...ちょっと出ていくのにもお金がかかるし、プロジェクトがいいものであって、何かそれに支援が入ってだと多分いろんなことができるんだけど。（I先生）
- 高校が山の中にあって、みんな生徒は保護者に車で生徒玄関前まで送ってもらってって感じなんですね。電車に乗るにしても、バスに乗って駅まで行って、そこから電車なんですよ。なので、すぐに街中に出ていけない。アートの研究していて、美術、放課後行っておいでとか言えたらいいんですけど、自分の足で動くことができないっていうのは、結構ネックだなと思って。本屋さん見ておいでとかも言えないので、何かそれは、ちょっと地域柄大変かなと思います。（G先生）

4.2.3.3 都道府県を超えることの意義

本取り組みは都道府県を超えた連携機会をつくるものであるため、県境を超えて連携することの意義やメリットについて調査した。

閉鎖的な人間関係では得られない多様な価値観への気づき

▶オンラインで交流することで、日常の生活空間では得られない意見や価値観に触れることができる可能性がある

- ずっと小さい時から一緒に育ってきてる子たちが多いから、やっぱり学校を超えての交流って貴重だと思います。（A先生）
- 変わったっていうところは、考え方・見方の視野が広がったのが一つかなと思います。やっぱり同学年だけど、幼いときからずっと同じ幼なじみとか長い子の集団が限られてる中で育ってたから、どうしても考え方は、なかなか自分のものから抜け出すことができない中で、こうやって全国の同級生または後輩とかと意見を交わしたりして、自分たちの考えてることが通用しないんだとか、当たり前だと思うことが実は彼らにとってはびっくりするようなことだったりということがわかった。（J先生）
- 自分の学校しか知らないの、それ以外の子たちと関わってこんな人もいるんだみたい気づけたのは、生徒にとって良かったんじゃないかなと思います。（G先生）
- 他の地域、特に刺激を受けるのはやっぱり都会の生徒と交流したときのギャップをすごく感じる生徒は多くて、生徒に合同授業の直後に話を聞くと、「こういう生徒がいました」「こういう人がいました」という、自分たちも見ただことのない同じ高校生の感想はすごく感じて（E先生）
- 今はもうネットがあるからスマホがあってもいろんなところと繋がることはできるんですけども、こういう他の都道府県の学校の生徒と繋がるっていうことはすごく生徒たちにとって貴重で有意義な体験だろうなと思います。…（合同授業のサポーターについて）学校以外の方からということが大きな魅力なんじゃないかなと思います。自分が住んでいるところの世界が大半だと思うので生徒にとっては、いくらでもスマホで繋がれる、繋がることのできる時代といっても、実際こういったオンラインであっても全く学校以外の大人がね、いろんな角度からアドバイスしてもらえるっていうのはありがたいなと思います。（H先生）

先入観を持たずに学び合う相手としての利点

▶背景を知らない生徒と交流することで先入観なく、意見を聞くことができる

- 県外は全くわからないので、同世代として。県内の近い学校とかだと、誰々の知り合いとかそういうので、繋がりがたくないみたいなのがあると思うんですけども、全く知らないとかだと、割とイキイキとできそう。先入観がない人たちと話ができるっていうので、そこはポジティブに捉えられる子もいるのかなと思いますけどね。（F先生）
- （同じ地域の知っている学校が相手だと）勝手に自分の中で上下を決めつけることがあると思うんですよ。枠組みにとらわれちゃう。逆に、背景がわからない方がすごいいいと私は思いました。（D先生）

構成校の多くは、中山間地域や沿岸部など、いわゆる地方に位置している。そのような地域に所在する学校では、地域資源や人的ネットワークが限られていることから、探究活動において取り上げられるテーマに偏りが生じやすいという課題がある。また、外部との接点が少ない環境では、調査活動やインタビューなどを通じて必要な情報や多様な視点を得ることが難しく、学びを深めていくうえでの障壁となることも少なくない。

さらに、小規模校であるがゆえに、生徒同士の人間関係が固定化しやすいという特徴もある。限られた人数の中で日常的に接する相手が決まってしまうことで、意見の多様性が乏しくなり、自らの視野を広げるきっかけを得にくくなる。これは、探究活動における協働や対話の質に影響を及ぼす要因ともなりうる。

県境を超えた学校間連携により、地理的に異なる場所で学ぶ他校の生徒とつながることで、多様な人間関係を築くことが可能となり、自校内では得られにくい新たな視点や価値観に触れることができるといった利点がある。また、生徒・教員双方にとって、先入観にとらわれることなく意見を交わし合い、関心や問いを共有しながら学び合う活動を行いやすい。都道府県という行政区分を超えたネットワークの構築は、地域や学校の規模に起因する制約を乗り越え、社会に開かれた探究活動を実現するうえで独自の利点を有することが示唆される。

4.3. オンラインネットワークが担うべき役割について

オンラインネットワークの基本的な役割

現地の資源（教員・地域）とオンラインネットワークはそれぞれ異なる強みを持ち、相互補完的な役割を果たすと考えられる。現地の資源（教員・地域）は生徒に寄り添いながら、日常的な指導やフィールドワークの機会を提供し、探究活動を継続的に支援する役割を担う。一方、オンラインネットワークは外部の知見や他校の生徒との交流機会を提供し、探究活動を広げ、深めるための拡張機能となると考えられる。

図表4-12 探究活動の高度化に向けた現地／オンラインネットワークの役割分担（仮説）

探究活動の観点	学校内で行われる教育課程 （総合的な探究の時間）	教育課程（総合的な探究の時間） を支えるオンラインの機能
整合性（目的と手段の合致）	生徒の背景や状態を理解した個別支援が可能	探究テーマが類似する生徒同士をつなぎ、目的の明確化を支援

効果性（適切な資質・能力の活用）	生徒一人ひとりに対する理解のもとで資質・能力の活用を支援	普段接することのない他者との関わりを通して自分の資質・能力について新たな気づきを得られる
鋭角性（問いの質）	各校の教員が近くで問いの精査をサポートし、指導する	異なる視点を持つ他校の生徒やサポーターからコメントを受け、問いの精度を高める／立てた問いの質を見直す
広角性（幅広い可能性や対象を考慮）	地域社会の多様な課題に直接触れ、フィールドワーク等を通じて視野を広げる	異なる地域・文化の生徒と交流したり、他者の探究活動を聞いたりして多角的視点を養う
自己課題（探究活動と自分とのつながり）	担任や学校の教員が生徒の個人的な興味・関心を理解し、探究テーマ設定を手助けをする	オンラインでの発表を通じて自己の学びを言語化し、整理する機会を得る
社会参画（学んだことを社会に還元）	在住地域でのフィールドワークや発表等を通じて、実社会と関わる	探究活動の価値や意味づけについて、サポーターや他校生徒から新たな視点を得られる
意欲（探究活動を深めようとする姿勢）	学校の教員が日々の学習の中で伴走し、継続的なモチベーションを支援	他校の生徒と意見交換することで刺激を受け、探究への自信を深める

上記のような探究活動に対する直接的な役割に加えて、教員にとっても、単独の学校内での学習に閉じるのではなく、他地域の学校とつながることで、自分たちの考え方やアプローチを相対化することが可能となる。これにより、教員が自身の探究活動をより客観的に捉え直し、内省を深める機会につながると考えられる。

4.4. 自走に向けた論点

本事業では将来的に本ネットワークが自走可能となるように、各年度において取り組み改善を構成校教員と行うとともに、オンライン連携の運営・継続ノウハウを明らかにすることを目指している。上述のネットワークに期待される役割をふまえ、①こういった活動を継続させていく必要があるか②どのようにして継続させていきたいかの2点について、インタビューの中で教員側の意識を調査した。

①継続すべきネットワークの機能について

関心を同じくする生徒同士との遠隔交流は、お互いの取り組みを紹介して刺激を与え合う機会として、他の機会とは代替しづらいとの意見が聞かれている。また、生徒対象の連携だけでなく、教員間の繋がりやの継続を求める声も聞かれた。

◆教員インタビューより

- 合同授業はぜひあるとすごくいいなっています。あとはポータルサイトとか、あの他校の相談の見れるサイトはすごくありがたい。あそことか合同授業とかがないと今年1年間の最後の形がだいぶ違うと思っていますので。
- 先生たちの交流は、個人的には続けてほしい。合同授業も残ると良い。授業時間内にサポーターの方と話ができるような機会もあると良いと思う。同じ目線というか、探究頑張っているぞと思ってる人同士で、内容テーマは全然違って交流の方が次に繋がりがやすいというか。
- (合同授業について) 学校としてその財産として残るものって言われたときに、うちの学校とかは対外的な発表の場とかがなかなかこの学年で取れてなかったところがあったので。... 向こうも向こうで頑張ってる、負けてられないなあってどこまでいかにしても、こんなことも俺たちもやろうかなみたいになっていうふうになるのは、やっぱり高校生同士の方が強いと思うので。

②継続性を高めるための方策について

プラットフォームの機能を持続させるためには、仲介者がいない場合でも学校間が連携できる体制構築が必要となる。そのために参加校教員同士が気軽に連絡を取り合える体制づくりや、姉妹校や連携協定を結ぶといったアイデアが聞かれた。

◆教員インタビューより

- いわゆる連携協力協定を、カタリバさんを仲介人として2校まとめていくとか。カタリバさんが入ってらっしゃるうちは常に積極的に交流しつつ、例えば年3回の取り組みの間に姉妹校みたいなイメージですね。
- 年度末の発表はまず校内でうちの学校やりますね、とお互いやった上で、最優秀グループとか上位3グループを、お互いが例えばオンラインで発表を見せたりとか、もしくは作成物、最後の探究レポートとかそういったものをお互い送り合ったりとかして、いわゆる大学でいうところ卒論の先行研究とかのストックをお互い一緒に作っていきましょうか、みたいになっていう考え方もできるかなと。

- 学校同士がリアルタイムではないけれども、メールなり電話なり、教員対教員、学校対学校の連絡手段の交換は今ないので、その提供の機会とか時間とかがあると何か入りやすいかなって。相手の学校さんの担当者この方ですみたいなどこまで話が行くと、学校間で勝手に連絡取りやすいかなって思います。

③学校だけでは担うことが難しい役割

学校同士を接続するコーディネート（生徒のテーマ別でのグループ分けや日程調整等）は、教員が現在の業務にプラスして担うことは難しいのではないかという声が聞かれた。実行するためには、コーディネーター等、専任の役割が必要であるといった意見も挙がった。

◆教員インタビューより

- 学校をピックアップしてコーディネートしてくれてグループを作ってっていうのは、個々の学校だけじゃできないから、そういうのはすごく大きいと思う。大変だと思うんですけど、生徒のグループ分けをしてテーマ別で分けてって、本当にすごく助かります。
- 先生同士で調整するのは大変。授業をやらなくて良いのであればできるが、専任のコーディネーターが必要なのではと思う。
- 日程調整なども含め、外部の方々にしていただかないとできないことだなと思っています。ある程度こちらの都合にも合わせてくれるのはありがたい。場の提供の意味でも大きい。

◆考察

都道府県を超えた学校間連携を継続的に展開していくためには、外部によって運営されている連携の仕組みを、部分的に学校側に移管していくことも考えられる。一方で、連携活動の実施に伴うスケジュール調整や他校との連絡、運営体制の構築などの業務を、学校現場の教員がそのまま担うのは困難であるという現実的な声も上がっている。したがって、連携のメリットを損なうことなく、その運営のあり方自体をいかに持続可能な形で維持していくかが今後の重要な課題である。そのヒントとして、学校間が自律的に連携できる協定等のアイデアが挙げられる。また実務上の負担を軽減する観点から、オンラインツールや情報共有基盤の改良を通じて、連携活動の実施をより効率的かつスムーズに行えるようにすることも、今後の検討課題として挙げられるだろう。

5. 来年度以降に取り組むべき課題

5.1. 来年度以降の課題および改善点

①探究活動の質向上に寄与するオンライン連携のあり方の工夫

○探究活動を深める協働的活動

・合同授業プログラム内において、他校の生徒とお互いの探究活動に対するアイデアを出し合う活動を取り入れる等、生徒同士の協働を促す工夫を行う。現在はZoomの機能のみを使用しているが、オンライン協働ツールの導入を試行的に実施する。

○生徒の興味・関心に応じた接続

・探究活動をより専門的に深めたいと考える生徒に対して、同じ関心を持つ生徒同士や、専門性を有する外部人材と確実に繋ぐ機会を設定したい。また、オンライン連携により得たアイデア等を探究活動の変化につなげていくためのフォロー方策を検討し実施する。

○生徒のニーズの即時的な把握と活用

・生徒の興味や探究テーマに関するニーズは、学習の進捗や個々の成長によって変化するため、柔軟に対応できる体制を構築する必要がある。定期的なアンケート調査を活用し、生徒の関心や課題をリアルタイムで収集・分析し、適切な支援につなげる取組を行う。

②学校・教員間ネットワークの拡充

○各校の課題の相互解消促進

・各校で行われる探究活動においては、生徒の意欲醸成や伴走支援の技術等に共通の課題がある。令和7年度は、教員間でも相手校の実践や課題を聴き合ったり、それぞれの工夫について情報交換を行ったりする機会を拡充する。

○教員間のネットワーク強化

・探究活動の成功事例や課題を共有する定期的な教員向けのミーティング等を拡充実施し、合同授業以外での個別連携につなげる関係構築を目指す。

③自走に向けた検証・体制の検討

○自走すべき内容と体制の検証

・上記1、2による本ネットワークの機能開発を進めながら、事業終了後に継続すべきポイントと体制について、構成校のニーズをもとに引き続き考察する。

○自律的な連携を促すための支援

・学校同士が自律的に連携できるように、各校の背景情報や、他校と連携することで可能になることを構成校に適宜情報提供していく。各校の生徒の探究テーマだけでなく、探究活動のアプローチも共有し、多様な観点で連携の糸口をつかむための促しを行っていく。

5.2. 来年度の検証事項

図表5-1 令和7年度の検証事項（プログラム別）

観点	取組内容	検証事項および実施事項
学校間での探究的な学びの機会 の構築・実施	オンライン合同授業（年3回）	【検証事項】 探究活動に対する直接的影響を高めるためにどのような手立てが必要か
		【実施事項】 ・ 合同授業の内容を、問いの見直しや具体的アイデアの獲得に至るようなプログラムへ一部変更する ・ 合同授業で得られた気づきやアイデアの活用につながるフォローアップの実施（他校生徒やサポーターからのフィードバックの可視化・オンラインツールを活用し、相互コメントをログとして共有する等） ・ 連携グループの固定化を試験的に実施する
	探究テーマが共通する生徒同士の個別マッチング・情報交換	【検証事項】 ・ 生徒間の学校を超えた協働的な探究を促すにはどのような働きかけが必要か ・ 各校による自律的な活用を促すにはどのような働きかけや仕組みが必要か
		【実施事項】 ・ 生徒の探究活動のステータスを定期的に把握するアンケート調査を実施し、各校にフィードバックすることでニーズの可視化と共有をはかる ・ 生徒の協働的な探究について関心がある学校に働きかけ、特定の生徒間の継続的連携を試行する
	放課後探究ゼミ	【検証事項】 ・ 探究の高度化に向けて特定テーマでの学び合いを促す機会とすることができるか
		【実施事項】 ・ 構成校の生徒の興味関心を調査した上で、特定のテーマを定めた交流機会を設定する
プラットフォーム構築	コアサポーター制度（外部人材プールの活用）	【検証事項】 ・ 各校による自律的な活用を促すにはどのような働きかけや仕組みが必要か
		【実施事項】 ・ 探究活動を支援している教員と外部サポーターを繋ぎ、教

		員が特定のテーマでサポーターから情報を得ることができる機会を設定する ・登録されているサポーターのプロフィールや追加情報について共有する機会を拡充する
	教員間連携	【検証事項】 ・学校間連携を通じて、教員の探究活動への意識や具体的な伴走支援スキルに対する影響を高めることができるか
		【実施事項】 ・通年で合同授業を同じ学校と行うグループを設定し、教員間で各校の探究活動の目標やカリキュラム内容等について相互理解を深めるミーティングを定期的に設ける ・希望する学校を対象として、探究活動の困りごとに対して相互相談し解消する機会を定期的に設ける
自走に向けた取り組み	継続すべき機能と自走方法の検討	【検証事項】 ・連携ネットワークのどの部分を継続・自走させるべきか ・自走すべき部分をどのように継続させていけるか
		【実施事項】 ・R6年度末～R7年度にかけて、教員へのヒアリングを通じて自走させていきたいポイントを整理

6. 参考資料

年度末アンケート項目（生徒用・教員用）

■生徒用アンケート項目

今回のオンライン合同授業についてお伺いします	
授業全体を通して、他校の生徒やサポーターとの交流を楽しむことができた。	全くそう思わない～とてもそう思う（4件法）
授業全体を通して、自分の考えや気持ちを他校生徒やサポーターに伝えることができた。	全くそう思わない～とてもそう思う（4件法）
これまで取り組んできた探究活動について自分の言葉で説明することができた。	全くそう思わない～とてもそう思う（4件法）
これまで取り組んできた探究活動に自信を持つことができた。	全くそう思わない～とてもそう思う（4件法）
今後の探究活動や自分の将来／進路について新たな視点やアイデアをもらうことができた。	全くそう思わない～とてもそう思う（4件法）
今回のオンライン合同授業全体について、あてはまるものを選んでください	全くよくなかった～とてもよかった（4件法）
今回のオンライン合同授業で得られた学び・気づきを教えてください	自由記述
交流に支障をきたすような長時間の音声トラブル・接続トラブルがありましたか	はい or いいえ
「はい」と答えた人は、状況をできる限り詳しく教えてください	自由記述
年間を通じた本事業の取り組み全体についてお伺いします	
オンライン合同授業（年3回もしくは2回実施）についてお伺いします	
オンライン合同授業の参加を通じて、 自分の探究活動に関して 変化がありましたか	全くなかった～とてもあった（4件法）
（「とてもあった」「あった」と回答された方のみ）具体的に、どのような変化がありましたか。	自由記述
オンライン合同授業の参加を通じて、 自分自身に関して 変化や成長がありましたか	全くなかった～とてもあった（4件法）
（「とてもあった」「あった」と回答された方のみ）具体的に、どのような変化や成長がありましたか。	自由記述
オンラインでの交流活動がうまくできずに難しいと感じたことはありましたか（音声トラブル・接続トラブル以外で）	全くなかった～とてもあった（4件法）
（「とてもあった」「あった」と回答された方のみ）具体的に、どのような難しさがありましたか。	自由記述
オンライン合同授業をよりよくするための意見やアイデアがあればお書きください	自由記述
オンライン合同授業以外の生徒向けプログラムについてお伺いします	
今年度本プロジェクトにて実施をした下記プログラムについて、当ては	

まるものをお選びください	
メタバース空間体験およびカタリバスタッフによる探究プロジェクト相談	参加した 存在は知っていたが、参加しなかった 存在を知らなかった
探究テーマが類似する生徒同士による、合同授業以外での個別交流	
各自の探究プロジェクトの相談および共有を行う放課後活動	
外部専門人材へのヒアリングおよび探究プロジェクト相談	
オンライン合同授業以外の生徒向けプログラムについて、よりよくするための意見やアイデアがありましたらお書きください	自由記述
「学校を超えた」もしくは「都道府県を超えた」ネットワークの特色や意義についてお伺いします	
他校の生徒と交流することは、自校の生徒との交流と違いがあると思いますか	全くそう思わない～とてもそう思う（4件法）
（「とてもそう思う」「そう思う」と回答された方のみ）具体的に、どのような違いがあると思いますか。またその中で、特に別の都道府県の高校と交流することの意義があれば教えてください	自由記述
みなさん自身の探究活動についてお伺いします	
探究活動をすすめるにあたって、難しく感じた項目について、当てはまるものをすべて選んでください	課題・テーマの設定 情報収集 情報の整理・分析 まとめ・発表 モチベーションの維持・向上 学校外の個人や団体との連携・協力 その他
探究活動をすすめるにあたって、「学校を超えた」もしくは「都道府県を超えた」繋がりは特にどういった場面で特に役立つと思いますか。ご自由にお書きください	自由記述

■教員用アンケート項目

年間を通じた本事業の取り組み全体についてお伺いします	
本事業への参加を通じて、 生徒の探究活動に関して 変化がありましたか	全くなかった～とてもあった（4件法）
（「とてもあった」「あった」と回答された方のみ）具体的に、どのような変化がありましたか。	自由記述
本事業への参加を通じて、 生徒自身に 変化や成長がありましたか	全くなかった～とてもあった（4件法）
（「とてもあった」「あった」と回答された方のみ）具体的に、どのような変化や成長がありましたか。	自由記述
本事業への参加を通じて、先生ご自身の探究活動への関わり方に関して変化がありましたか	全くなかった～とてもあった（4件法）
（「とてもあった」「あった」と回答された方のみ）具体的に、どのような変化がありましたか。	自由記述
本事業への参加を通じて、探究活動に関すること以外でご自身に変化	全くなかった～とてもあった（4件法）

がありましたか	法)
(「とてもあった」「あった」と回答された方のみ) 具体的に、どのような変化がありましたか。またそれはなぜですか。	自由記述
オンラインでの交流活動がスムーズに行われているグループにはどのような特徴があると思いますか	自由記述
オンラインでの交流活動がスムーズにっていないグループにはそれぞれどのような特徴があると思いますか	自由記述
本プロジェクト全般について、来年度に向けた改善点およびアイデアがありましたらお書きください	自由記述
オンライン合同授業以外の生徒向けプログラムについてお伺いします	
今年度本事業にて実施をしたオンライン合同授業以外の生徒向けプログラムについて、当てはまるものをお選びください	
メタバース空間体験およびカタリバスタッフによる探究プロジェクト相談	自校生徒が参加した存在は知っていたが、自校生徒は参加しなかった
探究テーマが類似する生徒同士による、合同授業以外での個別交流	存在は知っていたが、自校生徒が参加したかは不明
各自の探究プロジェクトの相談および共有を行う放課後活動	存在を知らなかった
外部専門人材へのヒアリングおよび探究プロジェクト相談	
オンライン合同授業以外の生徒向けプログラムについて、来年度に向けた改善点およびアイデアがありましたらお書きください	自由記述
教員向けプログラムについてお伺いします	
今年度本事業にて実施をした下記プログラムについて、当てはまるものをお選びください	
8月および12月に実施した教員研修会	参加した
ポータルサイト上にある、連携校の探究関連教材や探究活動事例シェア	存在は知っていたが、参加しなかった存在を知らなかった
教員向けプログラムについて、来年度に向けた改善点およびアイデアがありましたらお書きください	自由記述
「学校を超えた」もしくは「都道府県を超えた」探究ネットワークの特色や意義についてお伺いします	
本事業は「学校の枠組みを超えた」取り組みです。探究活動もしくはそれ以外の側面から、自校の生徒と交流することと他校の生徒と交流することに違いはあると思いますか	全くそう思わない～とてもそう思う(4件法)
(「とてもそう思う」「そう思う」と回答された方のみ) 具体的に、どのような違いがあると思いますか。またその中で、特に「都道府県を超える」意義があれば教えてください	自由記述
貴校で実施している探究活動についてお伺いします	
貴校で探究活動を実施するにあたり、現在困難に感じている項目について、当てはまるものをすべてお選びください	カリキュラムの設計 探究伴走(課題・テーマの設定) 探究伴走(情報収集) 探究伴走(情報の整理・分析)

		探究伴走（まとめ・発表） 探究伴走（モチベーションの維持・向上） 評価基準の設定 校内での探究活動に関する理解 外部との連携・協力 その他
	上記の項目のうち、「貴校の学校規模」により特に困難に感じてもらえることはありますか。理由も含めてご自由にお書きください。	自由記述
	上記の項目のうち、「貴校の立地条件や地域特性」により特に困難に感じてもらえることはありますか。理由も含めてご自由にお書きください。	自由記述
	貴校で探究活動を実施するにあたり、「学校を超えた」もしくは「都道府県を超えた」探究ネットワークは特にどういった場面で特に役立つと思われますか。ご自由にお書きください	自由記述
	貴校で探究活動を実施するにあたり、学校として本事業以外に関わった外部の関係者はどのような団体ですか。当てはまるものをすべて選んで下さい（個人も1団体として数える）	個人 友人 卒業生 自営業者 企業 他の小学校・中学校・高校 大学教員 大学、研究所等の研究機関 博物館や美術館 町役場・市役所 官公庁 財団法人、社団法人、NPO法人 その他